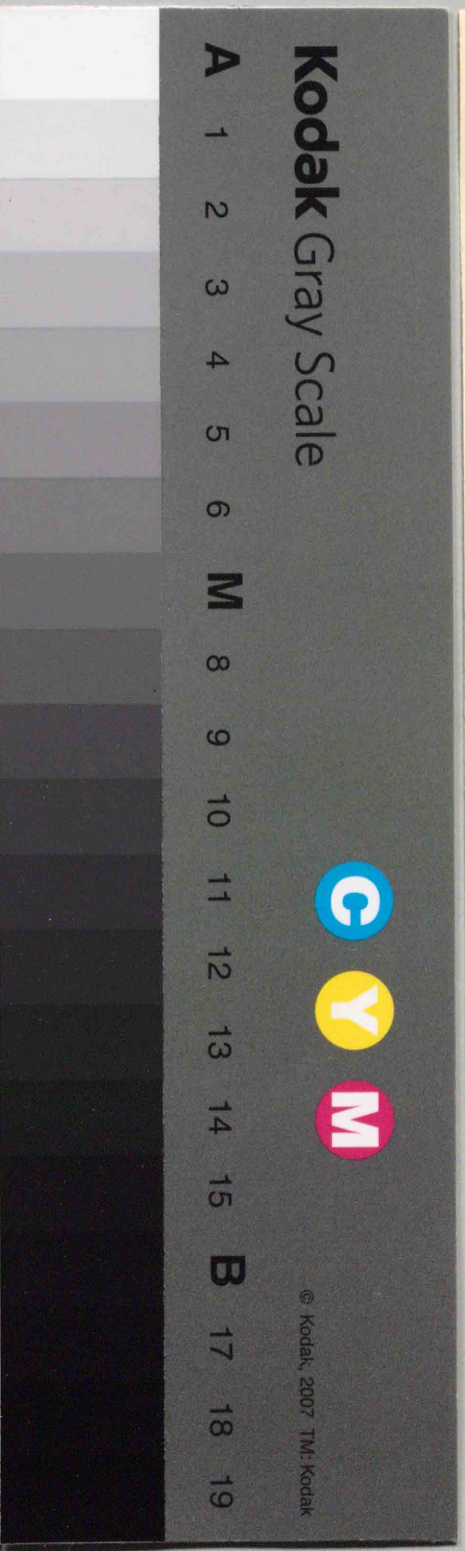
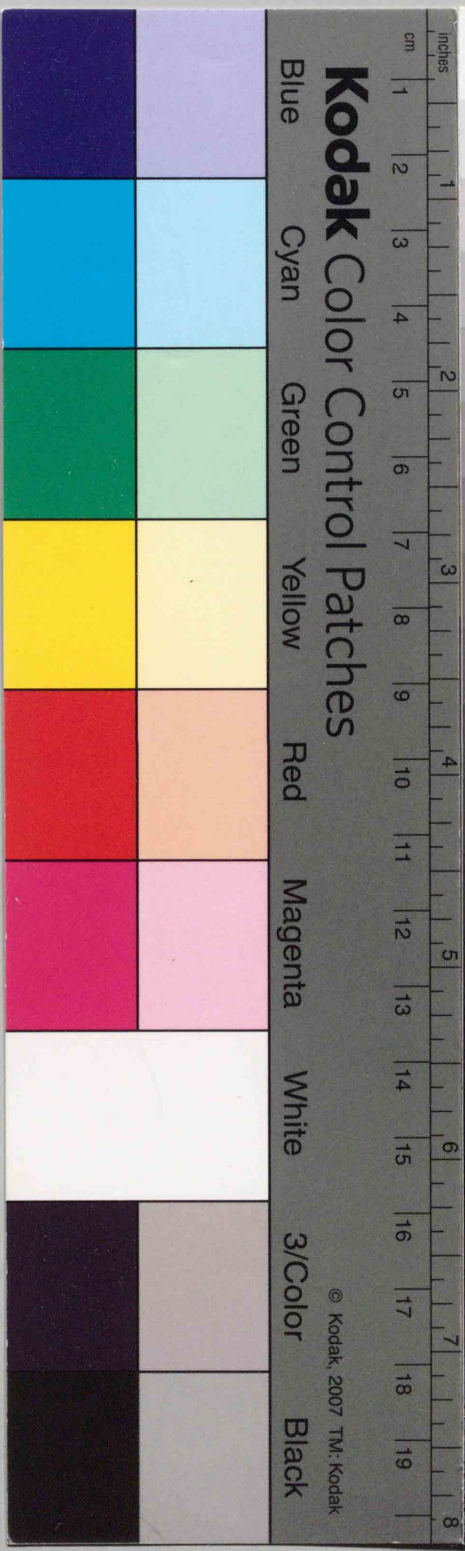
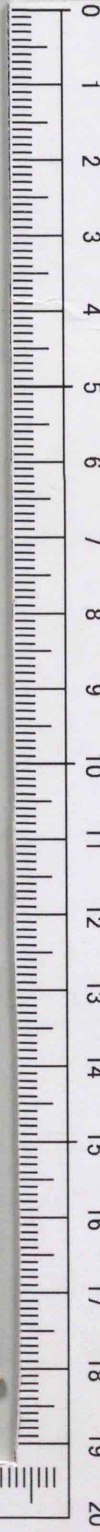


新體  
日本文學史教科書

文部省檢定濟  
藤岡作太郎著  
全

375.9  
Fu10  
資料室



42057

教科書文庫

4
810
41-1908
20000 35408



文部省檢定濟

明治四十二年二月十八日 中學校及師範學校用

東京帝國大學  
文部大學助教授

文學博士藤岡作太郎著



# 新體日本文學史教科書



東京

開成館藏版

## 凡例

一この書は、中學校、高等女學校、師範學校等の、日本文學史の教科書  
 にとて綴れるものにして、嘗て刊行したる新體日本文學史教科  
 書を更に修訂したるなり。

一大體の結構においては、從來の新體日本文學史教科書に異なら  
 ずといへども、ところ／＼これを修正し、またやゝその量を縮少  
 したり。前書も簡明を主としたれども、少き時間にては、それにて  
 もなほ教へ残ることなきを得ず、長きに失せんよりは、むしろ短  
 きに過ぐる方、教師に敷演の餘地を與へて、實際に便利なりと思  
 はるゝを以て、更にこの修訂の書を出せるなり。

一なほ上欄に注意すべき事項を擧げたり、時間の都合にて、教授の  
 際取捨して可なり。

一時代を五大期に分ち、明治の外は、更に各期を四小期に割きたる、また時代の分割も、記憶に便ならんが爲、圓數によりたることなど、前書に同じ。

明治四十年十月

編者識

目次

總論……………一

第一章 太古……………二

一 神代以來……………三

二 漢學公行以來……………七

三 佛教傳播以來……………八

四 奈良朝……………一〇

第二章 平安朝……………一八

一 弘仁時代……………二二

二 延喜天曆時代……………二五

三 藤原氏全盛時代……………三〇

四 院政時代……………三七

第三章 鎌倉室町幕府の世……………四一

一 鎌倉時代……………四三

二	南北朝……………	五〇
三	室町時代……………	五三
四	戰國時代……………	五五
第四章	江戸幕府の世……………	五九
一	寛永時代……………	六二
二	元祿時代……………	六四
三	寶曆前後……………	六七
四	文化文政時代……………	七〇
第五章	明治の世……………	七六



新體 日本文學史教科書

文學博士 藤岡作太郎 著

總論

文學とは何ぞ。文學は人の思想感情を美はしく文章の上  
に現はせるものにして、進んでは人生の祕奥を開かんとす  
るものなり。

國民文學史。一國には、その國民に固有なる思想感情あり、  
その國の文學はこの特質を發揮す。なほ一時代には時代の  
特質あり、文學者には個人の特質あり。一國の文學史は、これ  
らを舉げて説明批評し、その變遷の由來を究む。

日本文學史。されば日本文學史は、わが國民の特質を基礎

としたる文學が、各時代においていかに推移し、諸大家によつていかに異同あるかを究むるものなり。これらの變遷は、内政の治亂等、種々の影響を受くといへども、殊に感化の強かりしは、儒教と佛教となり。わが國民はその本來の思想感情に、この東洋の二教を融化し、近くはまた西洋思想を移植す。かくして東西兩洋の文學を以て培はれて、將來の日本文學は、その幹ますく、太く、その枝ますく、茂らんとす。

### 第一章 太古

**太古の文學。** 神代の年歴は知るべからず、建國より奈良朝の末に至るまで、年を経ること千五百年に近しといへども、文學の發達は甚だ遅く、常に單純にして素樸なり。海外の文物も移植せられたりといへども、その影響いまだ著しから

ず。

**自然と人心。** 國民の氣風は、その國の氣候地勢によりて養はる。日本の本洲が溫暖なる地位にありて、山水極めて明媚なるを思へば、わが國民が自然の景物を愛し、快闊の氣に富み、峻酷の風なきも、偶然にあらざるを知るべし。進取敢爲の性を備へ、雄壯にして武事に勵み、勤勉にして清潔を尙ぶも、またその特質にして、太古の文學はよくこれを現はせり。

#### 一 神代以來

神代より九〇〇頃まで。

**此時代の文學。** 太古、わが國には文字なし、或は神代文字といふものありきといへども、これを以て記したる文學的作品は存せず。この無文時代に、後世の如く發達したる文學は、望み得べからずといへども、歌謠、傳説、祝詞、壽詞の類は既に

當時の歌謡は古事記及び日本書紀のうちに見す。この書のことには後にいふべし。

存して、口より口に傳誦せられ、後人の筆に録せられたるあり、これらによりてほゞこの時代の文學を覗ひ知ることを得べし。  
**歌謡。** 歌謡は形式いまだ定まらず、一句の字數も限られず、短歌、長歌の別も明かならず、たゞ相互に長短の句を交ふる風は初より存す。疊句、對句を用ふること多きは、記憶に便ならんが爲に生ずる、無文時代の通習なり。いづれも物に觸れ、事に感じて、おのづから聲調の整ひたる言語をなすものにして、述ぶるところ、天真爛漫に、敘情を旨として、敘景詠物の作は極めて稀なり。作中に見ゆる鳥獸草木は、雉、鴨、鹿、猪、蘿蔔、蒜、桑、栗の類多く、その歌に入るは、美なるが爲にあらざ、偉なるが爲にあらざ、日常觸れ易きが爲のみ。傳はるところの歌謡、概ね國民が空想に耽らず、實際を尙ぶ風を現はせり。

神武天皇が長髓彦を討ちたまひし時の御製。

みつくし、久米の子らが、粟生には、か<sup>ヒラ</sup>葦一<sup>ヒト</sup>莖。其<sup>ネ</sup>根が<sup>ネ</sup>莖、其<sup>ネ</sup>根芽<sup>メ</sup>繋ぎて、討ちてし止まむ。

日本武尊が<sup>イッ</sup>出雲建<sup>モケル</sup>を討ちてよみたまへる歌。

やつめさす、出雲建が、佩ける太刀、<sup>ツ</sup>黒葛<sup>ラ</sup>多<sup>サ</sup>纏<sup>ヤ</sup>き、<sup>サ</sup>眞身<sup>ナ</sup>なしにあはれ。

**傳説。** 神代の傳説は、國土の成立、天神の經世、天孫の降臨等、概ね帝國の起源、祖神の偉業を述べたるものにして、萬世一系の國體、忠勇無比の士風が、國初より堅く人心に銘せられたるを示す。

**祝詞、壽詞。** 祝詞は神に申す祭文なり。わが國民はわけて敬神の心深く、國初の政は即ち祭政一致の制なれば、事毎に神に祈り、その折には祝詞をよみ上ぐ。祝詞の體は、ものによりて異同あれども、概ねまた天孫降臨、開國紀元の様より説き

傳説は古事記、日本書紀によりて知るべく、風土記のうちにも散見す。風土記のことまた後に見ゆ。

祝詞、壽詞は大抵延喜式(卷八)に出づ、延喜式は醍醐天皇の朝に撰せられたり。これらの祝詞、壽詞の最も古きは、神武天皇の時既に存せりと

いふ、それにも後人の潤色あるべく、その他後世の作も多かるべけれども、いづれもその體裁古風のまゝを存したるものなり。

始めて、祈禱の意を述べ、種々の供物を捧ぐる由を申す。五穀豊かに、疫病息み、禍亂收まらんことなど、祈禱の主意にして、殊に國民が農耕を主とし、風雨の和順を希ふ意は、おのづからその中に現はる。辭を列ぬること樸實なりといへども、雄渾正大の氣に富みたること、後世に比を見ず。壽詞も祝詞の類にして、朝廷の大禮、高貴の饗宴などに述ぶる賀詞なり。

祝詞大祓詞の一節。

かく宣らば、天つ神は、天の磐門をおし披きて、天の八重雲をいつの千別に千別きて、きこしめさむ。國つ神は、高山の末、短山の末に上りまして、高山の伊穗理、短山の伊穗理をかき別きて、きこしめさむ。かくきこしめしては、皇御孫の命の朝廷を始めて、天の下、四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧、夕の御霧を朝風、夕風の吹き掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を、舳解き放ち、舳解き放ちて、大海の原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌もちて、打ち掃ふ

阿直岐は百濟國魯王の後といひ、阿知使主も百濟の人なるが、後漢靈帝

事の如く、遺る罪はあらじと、祓ひたまひ、清めたまふ事を、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ、速川の瀬にます瀬織津姫といふ神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒潮の潮の八百道の、八潮道の潮の八百會にます、速開都姫といふ神、持ちかゝ吞みてむ。かくかゝ吞みてば、氣吹戸にます氣吹戸主といふ神、根の國底の國に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の國底の國にます速佐須良姫といふ神、もちさすらひ失ひてむ。

二 漢學公行以來

九〇〇頃より一二〇〇頃まで。

韓國の影響。神功皇后、征討の軍を發して、韓國を服したまひしより、かの國來貢し、爾來、海外の文物を輸入すること多く、國運の進歩頗る見るべかりき。  
漢學傳來。應神天皇の十五年(九四四)、百濟の阿直岐來り、翌年そのすゝめによりて、かの國の博士王仁を徵す。皇子菟道

の曾孫と稱す。

太古

八

稚郎子ワキイラツコこの二人に學びて、よく經義に通ず。ついで阿知使主アチノミナも來歸し、これより三人の子孫は、代々文事を掌れり。

文學進歩の遅緩。かくて漢文世に行はれ、史官も設けられたれども、文教の發達は産業の如く著しからず、公文官符の類こそ漢文を用ひたれ、世人は文筆に疎く、なほ前代の状態を繼續し、海外文物の傳播も、わが文學に影響すること少かりき。

當時の和歌も古事記、日本書紀のうち存し、なほ萬葉集にも散見すれども、數首に過ぎず。萬葉集のことは後にいふべし。

歌謡。この時代の和歌は、毎句の字數漸く五七に傾き、短歌、長歌の別もやゝ立ちたれども、内容の單純素樸なることは、前代と大差なし。文學進歩の遅々たること、太古の世には、已むを得ざりしなり。

### 三 佛教傳播以來

一二〇〇頃より一三五〇頃まで。

佛教の傳來。欽明天皇の十三年(一一二二)百濟の使來りて、佛教を傳ふ。ついで推古天皇の朝、聖德太子その興隆に力め、併せて文運の進歩を計る。これまで公の海外交通は、概ね韓國に限られしが、こゝに至りて始めて使節の隋に赴くあり、遣使の來往これより絶えず、學生僧侶は伴ひて支那に留學し、唐代の文藝を輸入す。この刺戟にあひて、久しく潛み居たる國民の智力は、一時に發展し、制度の改革、服飾の制定、寺院の建築、美術品の製作等、百般の事物は燦然として光彩を放つに至れり。

漢文學の勃興。唐代文藝の輸入と共に、わが國の漢文學も勃興せり。聖德太子が蘇我馬子と計りて、はじめに編纂せる國史は、惜むべし、燒亡して傳はらざれども、また太子の撰に成れる十七箇條憲法は、今に存して、當時の漢文の程度を示

太子の編著には、その講説にいろいろの勝鬘經疏等あり。金石文の現存せるもの最も古きは、法隆寺金堂の佛像の光背の銘

佛教傳播以來

九



(推古天皇の朝、宇治橋の斷碑(大化中)等なり。この時代の詩は懷風藻に出づ、この書のこと次の時代にいふべし。

この時代の歌人に、額田女王(メカダノオホキミ)最もすぐれたり。それらの歌また萬葉集に出づ。

す。漢字にて記したる金石文も、この時に至りて始めて見るを得べし。漢文の習得せらるゝに従ひて、また詩賦の詠あり。わが國の最初の詩は、弘文天皇及び皇弟河島皇子の御手に成れり。

**儒佛二教の影響。** 文運の發展は、佛教の傳來實にこれが動機たり。かの憲法は治國修身の訓令にして、儒佛二教の旨を以て倫理の大本とす。されど佛教の興隆は儒教を凌ぎ、工藝美術の進歩など、多くはその結果なり。

**和歌。** 和歌には儒佛二教の影響なほ極めて少し、されど時勢の進歩はおのづから吟詠の間に現はれ、國民の生活が餘裕を生じて、典雅なる性情の荅を開けるを見る。

#### 四 奈良朝

一三五〇頃より一四五〇頃まで。

**文學の進歩。** 大化の新政このかた、天智、天武二帝の政事に勵みたまふあり、國運の發達は文學の進歩を促がし、持統天皇の頃より奈良朝にかけて、光彩煥發、太古の文學はこゝに絶頂に達して、後代と異なる一時期を劃したり。

古事記は元明天皇の和銅五年(一三七二)成る、勅によりて太安履(オホノヤスマロ)が舍人稗田阿禮(ヒエダノアレ)の口演を筆記したるものなり。書紀は元正天皇の養老四年(一三八〇)成る、舍人親王(トネリノミコ)を總裁として安鷹等が撰せしものなり。風土記は和銅六年、諸國に命じて撰進せしむ、されど全く備はらざりしかば、醍醐天皇の朝

**國史地誌。** 文運大に開けて、こゝに纏まりたる書籍の編著あり、中にも、いま傳はれるわが國の最初の古典を古事記とす。この書は奈良奠都の後、間もなく成り、神代より推古天皇までの歴代の事蹟を述べ、文體は力めて國語のまゝに寫し、質實にして遒勁、神代の部は殊に趣味多し。のち數年、詔して更に詳確なる漢文の國史を編せしむ、日本書紀これなり。また諸國の地誌の編纂もあり、これを風土記といひ、今僅かに數種を存す。多くは乾枯なる記事にして、まゝおもしろき傳説を交ふるに過ぎず。

に至りて更に督促せられたりき。

古事記神代の一節。

故こゝに速須佐之男命申したまはく、しからは天照大神に申して罷りなむと申したまひて、すなはち天に參上ります時に、山川悉に動み、國土みな震りき。こゝに天照大神き、驚かして、我が弟の命の上り來ます故は、必ず善しき意ならじ。我が國を奪はむとおもほすにこそと宣りたまひて、すなはち御髪を解き、御髻に纏かして、左右の御髻にも、御鬘にも、左右の御手にも、みな八尺の勾瓊の五百箇の御統の珠を纏きもたして、背には千箇入の鞆を負ひ、五百箇入の鞆をつけ、また稜威の高鞆をとり、帯はして、弓腹ふり立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、稜威の雄たけび踏みたけびて、待ちとひたまはく、など上り來ませると問ひたまひき。

體裁の具はれることは、書紀まされりといへども、その漢文は、古意を枉ぐる弊ありとて、識者は却つて古事記の國文を貴しとす。されど古事記も、意に害なきところは、漢文體に作りて、これを訓讀せしめたるもの、また風土記も、大部は漢文

宣命の今に存するもの最も古きは、續日本紀の中に散見し、文武天皇の時より桓武天皇の時までのものあり。その以前のものは傳はらず、平安朝以前のものに漫に前者を摸擬するのみ。

懷風藻は淡海三船の撰といへど疑はし。眞備は文學を以て身を立てて、右大臣に至れり。仲麿は歸朝の途に颯風にあひてまた唐に至り、かの國にて歿す。

にて、時に國文を用ひたるものなり。

宣命。歌謠のほか、太古の純粹なる國文は、祝詞と宣命となり。宣命は天皇の百官庶民に宣りたまふ文にして、朗讀するが爲に、國語のまゝに綴りしなり。古樸にして莊重なること、祝詞に似たれども、その調や、新たに於て、時に儒佛二教の影響を見る。

漢文學の發達。祝詞、宣命等の國文を綴るにも、漢字を假らざるを得ず、その他の實用の散文は、概ね漢文を用ふ。従うて漢文學ますます盛にして、前代の末より詩賦を作るもの漸く多く、その作は載せて懷風藻にあり。懷風藻(一四一一)はわが國の詩集のはじめなり。聖武天皇の頃には、吉備眞備、安倍仲麿等唐に留學し、詩文ともにかの國の學士に比して恥づることなしと稱せらる。若かれどもこの時代の韻文の精華

萬葉集は二十卷あり、孝謙天皇の朝、左大臣橘諸兄（モロエ）これを撰し、後、久しからずして、大伴家持の補ひたるものならんといふ。

は實に和歌にあり。

**萬葉集。** 萬葉集はこの時代の末に成り、第二期以來の歌も載せたれども、多數はこの期のものにして、詠歌の甚だ盛に、題詠も漸く生じたるを見る。歌の種類には長歌、短歌、旋頭歌あり。長歌は句數に制限なく、五七の句を幾つも列ねて、五七七にて結び、多くは末に反歌とて短歌を添ふ。短歌は、その實長歌の最も短きものにして、即ち三十一字の歌なり。旋頭歌は五七七を二つ續けたるものをいふ。世を経るに従ひて、形式かくの如く定まりたれど、一句のうち、一二字の過不及は妨なし。殊に萬葉集の歌は、平安朝以來の如く拘束せられずして、詞の使用も自由なりき。

人麿は持統文武の朝に仕へて、石見に歿す、赤人は聖武の朝に仕ふ、共

**人麿と赤人。** 集中の歌人の最も有名なるは、柿本人麿、山部赤人なり。そもく、この時代の初紀綱張り、國運進み、外國文

に官位高からず。

化の採用と共に、國民の自信も固くなれり。人麿はこの時に出で、故人舊都を追懷し、祝詞に倣うて、あはく開國紀元より詠じ出して、和歌に壯大の調を加ふ。赤人は少しく人麿に後れて出で、自然の景物をよむこと少からず。人麿は長歌に長じ、赤人は短歌をよくし、共に雄渾にして雅麗なること、古今に超絶す。當時、漢學、佛敎盛なれども、二人はその直接なる感化を受けずして、國民固有の性情を詠じたり。

憶良は若くして遣唐少録となる、神龜の頃は筑前國司たり。旅人は征軍人持節大將軍となり、太宰帥となり、從二位大納言に至る。家持は天平中、越中守となりて治績あり、持節征東將軍となる。

**其他の歌人。** 赤人と同時に、山上憶良、大伴旅人あり、旅人の子に家持あり。憶良は漢文學に通じ、旅人父子は共に武官なり。憶良は人世を詠じ、倫道を説き、旅人は恬澹無爲の言を弄し、家持は題を取ること廣しといへども、殊に忠君愛國の旨を述べ、いづれも漢學佛敎の影響を帯び來り、思想はやゝ複雑になりたれども、その歌は到底、人麿、赤人の高邁なるに及

ばず。

此時代の和歌の特質。最もよく奈良朝の文華を代表するものは萬葉集なり。神代以來培ひ來りしもの、こゝに至りて柳櫻桃李の色を競ひ、殊に長歌はその比を見ず。和歌の内容は、率直なる感情をありのまゝに現はして、浮薄虚偽の嫌なしといへども、思想の單純にして變化少きことは、否むべからず。げにや太古文學の長所は、内容よりも形式にあり。人麿、赤人は、この點において大成し、枕詞を置き、對句を設けて、歌調の莊重大なるは、後世の纖弱なる風と正に相反す。憶良等がこの二聖に及ばざるは、主としてその措辭の粗雜なるによれり。

吉野宮の長歌及びその反歌。

やすみししわが大王オホキミ神ながら神さびせすと、吉野川たぎつ河内カワチに、高殿を

人麿

高しりまして、上りたち國見をすれば、たゞなづく青垣山ヤマト、山神ヤマノカミの奉ツクる御調ミツキと、春へは花かざしもち、秋たてばもみぢ葉かざし、遊副川ユフツカハの神も、大御食オホミケに仕へまつると、上つ瀬に鶺鴒川をたて、下つ瀬に小網コヅナさし渡し、山川もよりてつかふる神の御代かも。

山川もよりてつかふる、神ながらたぎつ河内に船出せすかも。

富士山の長歌及びその反歌。

赤人

天地アマツチの分れし時ゆ、神さびて高くたふとき、駿河なる富士の高嶺タカミネを、天の原ふりさけ見れば、わたる日の影もかくるひ、照る月の光もみえず、白雲もいゆきはばかり、時じくぞ雪はふりける。語りつぎ言ひつぎゆかむ、富士の高嶺は。

田兒の浦ゆうちいでて見れば、眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける。

當時の短歌の例。

士ツノやも空しかるべき、萬代に語りつくべき名は立たずして。憶良  
いざ兒ども、香椎の瀨セに、白妙の袖さへぬれて朝菜つみてむ。旅人  
たなばたし船のりすらし、まを鏡清き月夜に雲たちわたる。家持

## 第二章 平安朝

**文學の貴族的傾向。** 平安朝凡そ四百年は、上代文化の最も光彩ある時代にして、江戸幕府の世と併せて、わが國における文運極盛の二紀とす。されど上流の社會のみ發達して、人民の智能は、貴賤の間に、大なる逕庭あり。従うて百般の事物すべて貴族的傾向を帶び、實用を忘れて、粉飾に過ぎ、優麗を喜ぶ。されば文學も帝都貴族の間に行はるゝのみ、下流の人は文字を知れるものも少かりしなり。

**文事偏重の弊。** 尙武は邦人の通性にして、建國以來、朝政に參與せしものは、武門に出でたりき。されど平安朝の大勢力たりし藤原氏は、もとより文事を尙び、泰平に馴れては武事を卑む。文事を尙へば、文學の流行せるも、當然のことにして、

詩歌は管絃と共に、上流の人が必須の技と稱せらる。武事を卑み、風俗優柔に流るれば、文學もまたこの傾向を帶び、女子の宮廷に勢力ありしより、わけて纖弱の趣味を育成せり。加ふるに文弱の公卿は、京洛數里の間に籠居して、遠く出遊せず、悠々たる生活極めて單調なれば、思想の變化極めて乏し。従うて文學も一局面にのみ發展し、一旦その頂點に達しては、停滯し、沈衰するのみなりき。

**佛教の感化。** 漢文學も、前代よりひき續きて、重んぜられたれど、儒教は却つて佛教に壓せられて、人心を感化すること、到底彼に及ばず。佛教は、この時代のはじめ、天台、眞言の二宗更に傳來して、朝野に播まり、法事供養盛に行はれ、貴族の出家するも少からず。文學にも、人世のはかなく、宿命の免れがたきをいふこと、多くなりしかど、いまだ快關なる邦人の性

質の根柢を動かすに至らざりき。美を愛し情を重んずる風。太古以來、邦人は、老幼憐み、部伍睦みて、人に殘虐の行なく、おの／＼その業に安んじて相侵さず、無爲にして化すといふ様なり。因襲風をなし、儒佛二教傳來しても、これによりて人心を箝束する要を見ざりき。平安朝に至りても、なほ往古のまゝにして、外來人爲の道義は、制裁の力甚だ薄し。さりとして當時の人も徒らに慾念の奔放に任ずるにはあらず、力めて中正なる性情を養はんとす。かくして取るところの人生の尺度は、善よりも美なり、教育は意の鍛冶にあらずして、情の薰陶なり。若かれども情は狂ひ易し、物質的文化の開けて、これを制御すべき道義の存するなければ、その弊や浮華蕩逸となり、文學も實を失ひて華に過ぎ、輕靡綺麗に流れたり。

一 弘仁時代

一四五〇頃より一五五〇頃まで。

詩文の隆盛。太古より維新以前までは、學問といへば、第一に支那の文學、儒學を擧げたりといへども、この時代の如く、漢文學のみ行はれしことは、稀なり。既に大化改新の頃より、漢學は興隆の運に向ひ、爾來、年を追うて盛なりしが、嵯峨天皇は殊に漢文學を獎勵したまへり。その頃京都の大學、地方の國學の外に、名門貴紳が私學を設けて、一族の子弟を教育するもの多し。教ふるところ、經書、律令、算術等もあれど、唐代の學風を受けて、専ら詩文を重んじ、學者のうち文章博士の位置最も高し。

空海と篁。勅によりて編成せられし詩集には、凌雲集、文華秀麗集、經國集あり、いづれも弘仁前後の詩を集む。平城、嵯峨、

私學には空海の綜藝種智院、和氣廣世の弘文院、藤原冬嗣の勸學院、嵯峨天皇の皇后の學館院、在原行平の辨學院、恒貞親王の淳和院等あり。

空海の詩文を集めたるものに性靈集あり、その詩文を論じたる書を文鏡秘府論といふ。

道眞の詩文集に菅家文章、菅家後草あり、またその著者に類聚國史あり。菅原氏は清公に興る、その子に是善あり、道眞は是善の子なり。大江氏は音人に興る。二氏相並んで詩文界の覇たり。

淳和三帝みな詩を詠じ、殊に嵯峨天皇は才藻に富みたまふ。天皇と共に漢文學の興隆に力ありし人には、僧空海あり。空海は教界一派の祖たると共に、また文學の恩人なり。その唐に留學するや、佛教研修のかたはら、詩文を學び、歸朝の際には、かの國の有名なる詩文集を携へ歸る。わが國の漢文學は、蓋しこれより蔚然として興れるなり。當時小野篁また詩才に富みたりき。

菅原道眞。清和天皇以來、また詩文に名ある人少からざりしが、就中菅原道眞が平易暢達なる辭を以て、悲慘なる實境を詠じたる詩は、今に國民の同情をひくこと篤し。されどこの頃より、大江菅原の二家は、文學界における門閥の位置を占め、階級の固定は漸くその道を不振ならしめたり。  
支那文學の影響。當時の詩人が愛誦したるは、六朝より唐

文選は梁武帝の子昭明太子蕭統の撰にして、古今の詩文を類聚す、支那の諺にも文選爛秀才半といへり。白氏文集は唐の白居易(字は樂天)の詩文集なり、その作平易にして趣味深きを以て名高し。

代にかけての詩文にして、文選、白氏文集殊に重んぜらる。これらが社會と文學との上に影響せしことは、甚だ大なり。浮華驕奢、四時の遊觀の盛なるが如き、一はこれが爲なるべく、わが國の詩家歌人が取りたる題目も、彼に得たるもの多し。綴るところの文辭は、四六駢儷體を旨とし、語句の配置に苦心して、眞情の流露を忘れ、纖麗の態を喜び、漢文學はこれより衰微の運に向へり。

歌風の變遷。和歌は、弘仁の頃には、漢文學の流行に壓され、一時屏息の姿なりしが、清和天皇以來、やゝ頭をもたげて、漢詩と並び行はる。これもまた時俗と漢詩との感化を受け、浮華の體をなす。奈良朝には、歌人即ち武人なるもの少からず、隨うて和歌も剛壯の氣ありしに、今は文弱なる貴族が席上唱和の具となれば、その風の變化せしや知るべし。かく

業平は平城天皇の皇孫なり、その兄行平もまた和歌に名あり。世に業平、遍昭、小町、文屋康秀、大伴黒主、喜撰法師を六歌仙と稱す。

神樂催馬樂の歌曲を選定せるは、その初貞觀年間あり。

て五七の調は七五に轉じ、長歌は殆ど衰滅せんとし、爾來この風永く渝らず。在原業平は當時第一の歌人なり、眞率なる詩想の迸出するに任せて、辭句の修練の如きは、深く注意せず。僧正遍昭、小野小町またこれと聲名を齊しくせり。

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、わが身ひとつはもとの身にして。業平はちす葉のにごりにまなぬ心もて、なにかは露を玉とあざむく。遍昭色見えでうつろふものは、世のなかの人の心の花にぞありける。小町

**神樂、催馬樂。** 當時また神前に樂器に合せて奏するうたひ物に神樂、催馬樂あり、平安朝の半を過ぐる頃まで、盛に行はる。神樂の一部は普通の短歌にして、その一部と催馬樂とは民間の俚謠より取れるもの多し。これらの俚謠は、概ね奈良朝の末よりこの時代の初にかけてのものなるべし。  
**假名の弘通と物語類。** 久しく漢文は行はれしかど、なほ言

片假名は漢字の眞書の省畫より成り、平假名はその草書より成れり。いづれも一人の作にはあらざるべし。竹取は竹の中より生れたりといふかぐや姫を主人公とす、姫はもと月界の仙、罪を得てしばらく人界に生れ、のち月宮に歸り上るといふ物語なり。伊勢は歌を主としたる片々の小話を集めたるものにして、その歌多くは業平の詠なり。

ふところを自在に筆にするは、容易きわざにあらず。よりて奈良朝には、字を假りて音を寫す萬葉假名なども用ひられしが、これも複雑なれば、ついで片假名、平假名の製作あり。この假名は、奈良朝よりこの時代にかけて、次第に出來しものなるべく、その使用の弘まるに隨ひて、散文は發達せり。散文の發達は小説日記類に見るべく、その魁として、竹取物語の如き傳奇小説を見るに至れり。これと前後して伊勢物語あり。二書の簡潔にして古樸なるは、後人の擬せんとして及び難きところなり。

## 二 延喜天曆時代

一五五〇頃より一六五〇頃まで。

**古今集。** 平安奠都以來、年久しく、紀綱漸く弛みて、地方離叛せんとすれども、帝都の文化はいよく、光彩あり。世に醍醐



遣唐使の廢止は寛平七年の事なり、その折菅原道真大使たりしが、唐末亂離の狀を奏して、遣使の益なきを述べたるによれり。

古今集は和歌勅撰の始にして、爾來これを以て歌學第一の書とす。江戸時代に至りては萬葉集を貴ぶものあり、また新古今集を取るものあれども、なほこの書は大に重んぜられたり。

天皇の朝を延喜の聖代と稱す。弘仁時代は専ら外國の文藝を謳歌せしが、この時代に至りて、一方には遣唐使を廢すると共に、支那文物の研究は衰へ、一方にはわが文化の發展に伴ひて、國民の自信は長じ、かくして純一なる國民的文藝は歓迎せらる。繪畫には巨勢金岡ありて、美術を國風に化し、文學には和歌盛に行はれて、漢詩を壓す。歌界には紀貫之ツラユキ、凡河内躬恒等新たに出で、こゝに弘仁の詩文隆盛は延喜の和歌勃興と變れり。延喜五年(一五六五)貫之、躬恒等勅を奉じて、古今和歌集を撰し、萬葉集以後、當時に至るまでの歌を集む。歌體こゝに至りて定まり、主觀的敘情を主とし、優麗の調を尙び、永く後世に範を垂れたり。

**貫之と躬恒。** 古今集の編成は、貫之の功重きに居る。貫之の歌を作るや、刻苦經營、想と辭と相合はしめんとして、一語一

句苟しくもせず、眞に雅正の氣あり。後世彼を歌道の宗として、人麿と併せ稱す。躬恒これと並び立ち、才氣の横溢を以てまされり。

ひとはいさ、心もゑらず、故郷は花ぞ昔の香にはほひける。

貫之

逢坂の關の清水にかけみえて、いまや曳くらむ望月の駒。

同

春の夜の闇はあやなし、梅の花色こそ見えね、香やは隠るゝ。

躬恒

住の江の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つゑらなみ。

同

**貫之の散文。** 貫之は和歌のみならず、散文にも力を盡し、これより假名文大に世に行はる。その古今和歌集序の如き、漢文の脈絡を應用し、國文の一體を開く。されど駢儷體より出でて、やゝ華麗に過ぐる難なきにあらず。貫之また晩年に土佐日記を作る、文體簡淨、國文の軌範と稱せらる。

土佐日記正月二十一日の條。

二十一日卯の時ばかりに船いだす。みな人々の船いづ。これをみれば、春の

土佐日記は貫之が土佐の國守の任果てて京に上りし海路の日記にして、自ら一婦人に擬して書きたり。

海に木の葉しもちれるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらむ。風もふかすよき日いできて漕ぎゆく。この間に使はれむとて附きてくる童あり。それがうたふ歌。

なほこそ國の方は見やられるれ、父母ありとし思へば、かへらや。

とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつゝ漕ぎくるに、黒鳥といふ鳥、巖の上を集まり居り、その巖のもとに浪白くうちよす。楳取のいふやう、黒鳥のもとに白き浪をよすとぞいふ。この詞何とにはなけれど、物いふやうにぞきこえたる。人のほどに合はねば、答むるなり。かくいひつゝゆくに、船君なる人、浪をみて、國よりはじめて、海賊むくいせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。七十、八十は海にあるものなりけり。

わが髪の雪と磯邊の白浪と、いづれまさされり、沖つ島守。

楳取いへ。

後撰集と拾遺集。

村上天皇の朝は、天曆の聖代とて、延喜時

拾遺は一條天皇の朝に至りて成る、古今に後撰、拾遺を併せて世に三代集といふ。源順の撰に和名抄あり、現存せる字書類、甚だ古きものなり。

宇津保は藤原仲忠といふ貴公子と貴宮(アテミヤ)といふ姫君を主人公として、貴族の生活を寫す。落窪は落窪の君とて繼母に虐げられし女の立身出世せりとい

代と並べ稱せらる。天慶承平の亂こゝに終りて、都人は更に泰平に安んじ、學者文人また輩出す。延喜時代の反動として、漢文學や、復興せるが如くなれども、全詩の結構よりは、寧ろ一二句の修辭に苦心して、器局小に過ぎ、畢竟漢詩の衰運に向ひたるは、疑ふべからず。和歌は盛に行はれて、これを詠ずるもの日々に多し。天曆五年(一六一二)、源順等勅を受けて後撰和歌集を撰す。これを古今集に比するに、措辭や、蕪雜に流れたり。その後、また拾遺和歌集の撰ありしが、後撰と共に、大體においては、古今の前轍を蹈むに過ぎざりき。

宇津保物語等。假名の使用はますます擴張し、散文も漸次複雑となりて、こゝに宇津保物語の長篇を出すに至れり。人情の描寫を主とする小説は、これを始とすべく、九百年に餘れる昔に、この大作ありしは、歎美に堪へたれども、その缺點

ふ物語にて、滑稽の趣に富む。

は情を寫して眞ならず、辭を行ふことも粗なるにあり。當時の小説にまた落窪物語あり。

### 三 藤原氏全盛時代

一六五〇頃より一七五〇頃まで。

**假名文全盛。** この時代の上半は、即ち攝政道長が榮華に誇りし時にして、藤原氏の勢力絶頂に達し、一門宮廷に跋扈して、花月の遊に耽れば、文藝にも、優美なる平安朝の特性は最もよく發揮せらる。漢文學は、男子が唯一の學問として行はれたれども、既に傾き來りし運命の回復すべくもあらず。今や文學の中心は全く移りて、當時の傑作は實に假名文を以て記されたり。されど學問に誇れる公卿は、卑みてこれを用ひず、いはゆる女文字に甘んぜし女子をして、却つて千歳不朽の名を博せしめたり。

**上流の風俗。** 當時の廷臣は京都に蟄居して、地方の事を知らず、行政軍事を賤みて、宴飲管絃に日を送り、宮女と和歌を唱和するを事とす。權力扶殖の手段としては、名流貴族いづれもその女を後宮に納れて、皇室の外戚とならんことを望む。かくて多くの女御更衣榮寵を競ひ、おのゝ才能ある女子を侍女として相誇る。さればこそ當時の女流には文學に秀でたるものも輩出せしにて、その歌ふところ、書くところ、京都のこと、殊に宮廷のこと多く、その風のますく、優美柔弱に流れたるも、またこれが爲なり。

**清少納言と紫式部。** 當時の女流の最も文才あるを清少納言、紫式部とす。二人はたゞに當時の第一流と稱すべきのみならず、古今を通じてまた第一流の文學者なり。清少納言は一條天皇の皇后定子(道長の兄關白道隆の女)に仕ふ。その著

定子と彰子とは同じく後宮にありて顯榮を競ひたまひ、その侍女に文學に秀でたる人多し、殊に彰子において然り。

源氏物語五十四帖は光る源氏といふ貴族を中心とし、多くの婦人を點出して、よく一々の品性を描寫す。源氏薨じて後は、その子薫大將を主人公とし、失意の境遇に置きて、父の得意に對照せしめたり。紫式部には別に紫式部日記の著あり。

枕草紙はわが國の隨筆のはじめにして、見聞せるまゝ、思ひつきたるまゝ、を筆に任せて敘述し、寸鐵人を殺す趣あり。筆鋒の鋭利なるは、その才の男子を凌ぐを知るべく、觀察の緻密なるは、女子の特性を現はせり。紫式部は一條天皇の中宮彰子(上東門院)といふ、道長の女に仕ふ。源氏物語はその筆に成りて、貴族の生活を寫せる長篇の小説なり。巧に長篇を組織して、抑揚あり、波瀾あり、修辭精到にして流麗なり。さればこの書を以てわが國第一の小説と稱するは、當然の評なり。

うつくしき物。(枕草紙の一節)

瓜にかきたる兒の顔。雀の子のねずなきするに躍りくる。また紅などつけてするたれば、親雀の蟲などもてきてくゝむるも、いとらうたし。三ばかりなる兒の、急ぎてはひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の、目に髪の覆ひたるを、かきはやらで、うち傾きて

物など見る、いとうつくし。手緋がけにゆひたる腰の上の、白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられてありくも、うつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむほどに、かいつきて寐入りたるも、らうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいと小さきを、池よりとりあげて見る。葵の小さきも、いとうつくし。何もく、いと小さき物は、いとうつくし。いみじう肥えたる兒の、二ばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の薄物など衣長くて、手緋あげたるが、はひいでくるも、いとうつくし。八、九、十ばかりなる男兒の、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。鶏の雛の、脚高に、白うをかしげに、衣短かなる様して、ひよくとかしがましくなきて、人の後にたちてありくも、また親のもとにつれだちありく見るも、うつくし。鴨の卵。舍利の壺。撫子の花。

光源氏が須磨のわびすまひ。(源氏物語須磨の卷の一節)

須磨には、いと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の關ふきこゆるといひけむ。浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人すくなにて、うち息

みわたれるに、一人目をさまして、枕を敬て、四方の嵐を聞きたまふに、浪たゞこゝもとにたちくるこゝちして、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりけり。琴を少しかきならしたまへるが、われながらいとすごうきこゆれば、ひきさしたまひて、

こひわびてなく音にまがふ浦浪は、思ふ方より風やふくらむ。

とうたひたまへるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、まのばれて、あいなう起きるつゝ、漢をまのびやかにかみわたす。げにいかに思ふらむ、わが身一により、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつゝ、思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると、おぼすにいみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれ言うちのたまひ紛らし、徒然なるまゝに、いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をしたまひ、珍らしき様なる唐の綾などに、様々の繪どもをかきすさびたまへる、屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語りきこえし海山の有様を、遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゞすまひ、二なくかき集めたまへり。この頃の上手にすめる千枝、常則などをめして、作

繪つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有様に世の物おもひ忘れて、近うなれつかうまつるをうれしきことにて、四人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろ／＼さき亂れ、おもしろき夕暮に、海みやらるゝ廊に出でたまひて、佇みたまふ御様の、ゆゝしう清らなること、所からはましてこの世のものとも見えたまはず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯まどけなく、うち亂れたまへる御様にて、釋迦牟尼佛弟子となのりて、ゆるゝかによみたまへる、また世にまらさきこゆ。沖より舟どものうたひのゝしりて、漕ぎゆくなどもきこゆ。ほのかにたゞ小さき鳥のうかべると見やらるゝも、心細げなるに、雁の列ねてなく、聲、櫂の音にまがへるを、うちながめたまひて、御涙のこぼるるを、かきはらひたまへる御手つき、黒木の御數珠にはえたまへるは、……人々のこゝちみな慰みにけり。

**和泉式部等。** 和歌にて、當時無雙の名家は和泉式部なり。和

泉式部は紫式部と同じく彰子に仕へ、天稟の詩才、物に觸れ

和泉式部にはその家集の外に和泉式部日記の著あり、その子小式部内侍

も和歌に名あり、赤染衛門、伊勢大輔等もまた當時の歌人なり。

事に感じて、咳唾珠をなす。藤原公任は和漢の學に長じ、歌道においても第一の先達と稱せられしが、舊習を墨守して、その實は名にかなはず。これに反して、曾根好忠は時風の因循固陋に厭き、ひとり用語の自由、格調の變革を唱へたれども、その作に險難の語句多く、世人はこれを卑しとして顧みざりき。

**道長薨後の頽勢。** 道長薨じて後、藤原氏の勢や、傾き、國運もまた振はず。地方には平忠常の亂、前九年の役あり、武人處處に地を占めて、漸く實力を養ひ來る。藤原氏と共に浮沈せし文學は、こゝに至りてまた漸衰の運に向はざるを得ず。小説も勢源氏に極まり、その後の製作はこれを摸擬するに過ぎず。その他の編著にして見るべきものは、邦人の漢詩文を選びたる本朝文粹、和漢天竺の雜談を集めたる今昔物語な

源氏物語の後にでてたる小説にては袂衣、濱松中納言等を推すべし。本朝文粹は藤原明衡の編纂にかゝる、今昔物語は源隆國の撰なりと傳ふ。

どあるのみ。

#### 四 院政時代

一七五〇頃より一八五〇まで

**院政時代。** 後三條天皇英邁の資を以て親しく政を視たまひしより、藤原氏の權力は衰へ、引いて院政の世となりぬ。紀綱や、伸張し、人心また興奮せりといへども、白河、鳥羽の二帝奢侈を好みたまひ、君臣ともに容儀を修すること婦人の如く、後三條天皇の振肅も直ちに弛みて、風俗はますます、浮華に流る。源平鬪争の世、京都も禍亂の巷となりしが、月卿雲客なほ姑息の安を貪りて、舊習を更むるを喜ばず。かゝる時、長篇大作の出づること稀にして、一時の唱和、半日の消閑に便ある短歌が、ひとり流行を極めしも、偶然にあらず。  
**和歌の新體。** 古今集の風調は、歌道の正風として、久しく行

俊頼の家集を散木奇歌集といふ、好忠の曾丹集と併せて、用語の放縱と難解とを以て名あり。

はれたりしが、世人は久しくその陳套に飽けり。この時に當りて、改新の旗を翻へししを源經信とす。その子俊頼出藍の才を以て、大に新體を唱へ、藤原基俊保守の見を懷いて、俊頼と衡を争ひしかど、天下は靡然として新體に傾く。新體は前期の曾根好忠の詠に得るところ多く、用語を自由にし、日常の俗語をも採り、また助辭を略し、名詞にて結びなどして、句格を緊密ならしむ。殊に多とすべきは、和歌の題目を擴め、まばく、客觀的に自然の景物を詠ずるに至れることなり。されどその弊や、奇を好み、俗に流れ、蕪雜にして統一なく、擾亂せること、恰も源平の争の如くなりき。

千載集の成りしは文治三年(一八四七)なり。

**千載集。** 時に藤原俊成千載和歌集を撰して、新體の長短を取捨す。溫雅にして清新なる一體、こゝに至りて漸く定まれり。されどこの改新も根本的の轉化にあらず、社會の思想に

變動なければ、和歌の内容も舊の如くにして、むしろその形式において、精細巧緻なるに至りしなり。さるが中に群を抜きて異色ありしを、僧西行とす。

**西行。** 西行はもと武門の人なり、世をはかなみて出家し、四方を周遊して、風月を友とす。常に山水の景に接して、天成の才を養ひ、詞句に拘泥せずして、自在に感想を吐露す。時に佛教の腐敗も既に久しくして、こゝに革新の氣運に向ひ、新たなる宗教まさに起れり。西行この時に出でて、詠ずるところ佛教の趣味多く、和歌の内容に深邃の度を加へたり。

西行の家集を出家集といひ、大に世に行はる。

夕されば、門田の稻葉おとづれて、蘆のまろやに秋風ぞふく。	經信
うづらなくまのの入江の濱風に、尾花波よる秋のゆふぐれ。	俊頼
夕されば野邊のあきかせ身にしみて、鶉なくなり、深草の里。	俊成
道のべに清水流る、柳陰、玄ばしとてこそたちとまりつれ。	西行

歌論の起原については、異説ありといへども、實之の古今集序などその魁なるべきか。

**歌論の勃興。** 和歌の流行と共に、歌論の學も勃興するに至れり。歌論はもと支那の詩論より出でたり。前期に藤原公任出でて、やゝ體を備ふるに至りしが、この期に至りて、始めて盛なり。藤原基俊博覽に誇りて、一家の見を立て、藤原俊成これに學びて、別に家學を開き、天下の師表となる。藤原清輔また歌論に名あり。されど淺薄なる形式の論、無益なる舊例の争のみ多かりき。

朗詠を集めたるものには藤原公任の撰せる和漢朗詠集、藤原基俊の新撰朗詠集あり。

**朗詠と今様。** うたひ物としては、平安朝の中世このかた、朗詠、今様盛に行はる。朗詠は曲節を設けて詩句短歌を朗吟するなり。今様は七五の句を重ねたるものにて、その句數の四なるもの殊に多し。平安朝のはじめ、既に佛敎を讚したるものなど見え、いろは歌の如きもその一なりしが、この時代の婉柔なる姿を好む風に投じて、大に世に行はれ、ついで次期

にも及べるなり。

舊都の詠。(今様)

古き都をきて見れば、

淺茅が原とぞなりにける、

藤原實定

月の光はくまなくて、

あき風のみぞ身にはしむ。

榮華物語は赤染衛門の手に成れりとの説あれど、信じ難し。大鏡を藤原爲業の作と稱すれどまた定かならず。その後出來たるものに水鏡、今鏡、増鏡等あり。

**國文體の歴史。** 散文の見るべきものには、僅かに榮華物語、大鏡等あり。榮華物語は長くして冗漫に、大鏡は史記に倣ひて作れるものにして、筆路頗る勁拔なり。二書ともに、關白道長を中心として、藤原氏の榮華を寫し、わが國の國文體の歴史のはじめなり。

### 第三章 鎌倉室町幕府の世

**文學の不振。** 源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに變ず。武人權力を握りて、兵事に勵み、戦亂をばく起りて、庶民は



疲勞し、從うて文學も衰微せり。出づるところ、多くは見聞の事蹟もしくは古事來歴を記述したる軍記、雜纂、隨筆、有職の書などにして、想像力によれるものは少し。

**文學の佛教的傾向。** 公卿は政權を失ふと共に、意氣も沮喪し、因循姑息にして、古人の糟粕を嘗むるに過ぎず。武人は文事を輕んじて、文學に志すもの多からず。この時に當りて、武家の祐筆となり、參謀となりて、専ら文筆に従事したるものは、僧侶にして、純文學も多くはその手に成れり。さればこの時代の文學に、佛教的傾向の存すること、平安朝よりも甚だしきは、一は僧侶の手に成れるが爲にして、一は時勢の然らしめしなり。當時、頻繁なる變亂は、社會をしておのづから厭世に傾かしめたる折しも、禪、淨土、一向、日蓮等の新宗派、或は支那より傳はり、或はわが國に起りて、大に行はれ、深く人心

の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。儒教の影響の文學に現はれたることもあれど、佛教に壓せられて、その勢力は微々たりき。

一 鎌倉時代

一八五〇頃より一九八〇頃まで。

**鎌倉初期。** 鎌倉時代のうち、文壇の最も賑はひたるを、そのはじめ三四十年とす。時に後鳥羽天皇帝室の式微を憂へ、銳意事に當りたまへば、都人も前途に希望を有して、新たに活氣を生じ、文藝もこれが爲に一時の盛況を呈したり。

**新古今集。** 文學は前期にひき續きて、和歌最も盛なり。元久二年(一八六五)、後鳥羽上皇の勅によりて、藤原定家、同家隆等、新古今和歌集を撰す。延喜よりこの時に至るまで、和歌の勅撰八度に及びしが、そのうち古今と新古今と殊に勝れたり。

八度の勅撰は古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今なり。

當時の歌人のうち定家殊に後人の尊崇を得、貫之と並べて和歌の聖と仰がる。その子爲家の妻（阿佛尼）また和歌をよくす。その東下の紀行十六夜日記世に行はる。

新古今は千載の歌風を大成したるものにして、彼の清新の體を節するに、更に古今の古調を以てしたるなり。  
**當時の歌人。**上の好むところ下これに靡き、當時有名なる歌人輩出す。後鳥羽、土御門、順徳の三帝、ともにその道を得たまひ、攝政藤原良經は天授の才を以て時流を詠じ、その叔父僧慈圓は西行に學びて、好んで佛教の趣味を含め、將軍實朝は萬葉の古調を喜ぶ。定家は俊成の子にして、家隆と共に、名匠の譽一世に高し。定家は古語の平穩なるを喜べども、措辭は巧緻を極めて、時に了解に苦むものあり、家隆は暢達の調を用ひたり。

われこそは新島守よ、隱岐の海のあらしき浪風、心してふけ。  
足柄の關路こえゆくまのゝめに、一むらかすむ浮島が原。  
武士の矢竝つくるふ小手の上に、霞たばしる、奈須の篠原。

後鳥羽上皇  
良經  
實朝

山のはの月まつ空のにはふより、花にそむくる春のともしび、  
かすみたつ末の松山、ほのぐと波にはなる、横雲のそら。

定家  
家隆

**軍記の勃興。**平安朝のなかば頃より、漢學漸く衰へ、上流の人はなほこれを第一の學問となせども、多くは純粹なる漢文をかきえず、こゝに和漢混交の一體を生ず。衰ふるはまた興る基にして、この文體は國文の優美に漢文の遒勁を交へ、幽玄なる佛語をさへ加へて、遂に後世通用の文となりたり。  
この混交體の大に光彩を放ちたるは、源平争鬪の始末を記したる軍記類なり。そもく、源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものの感懷は、うたゝ假作小説よりも深し、こゝにおいて軍記の作あり。その最初に出でたるは保元物語、平治物語にして、文章や、質實なり。ついで平家物語、源平盛衰記の作あり、この二書は大體の組織を同じくすれども、

保元、平治は葉室大納言時長の作と傳ふれども詳かならず。平家と盛衰記との前後については、古來異論あり、平家は僧慈圓に扶持せられし信濃前司行長の作と傳ふ、されどこれも定かならず。すべてこれらの軍記は虚實相交はれる

ものなることを忘るべからず。

平家は諷誦せんが爲に悽惋の調を加へ、盛衰記は記事の委曲を盡さんことを期す。これらの軍記は史實に據りて、去かも史實に拘泥せず。思ふに源平時代より建長年間までの作なるべし。

大原御幸の一節・平家物語

遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり、青葉にみゆる梢には、春のなごりぞをしまるゝ。卯月二十日餘のことなれば、夏草のまげみが末をわけいらせたまふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡たえたるほどもおぼしめしやられて哀なり。西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院これなり。古う造りなせる泉水、木立よしある様の所なり。いらかやぶれては霧不斷の香をたき、とぼそおちては月常住の燈をかゝぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の若草まげりあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫にさける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりもめづらしく、岸の山吹さ

きみだれ、八重立つ雲のたえまより、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、波の花こそさかりなりけれ。

ふりにける岩のたえまよりおちくる水の音さへ、ゆゑよしある所なり。緑蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも、筆も及びがたし。女院の御庵室を叡覽あるに、軒には鳶あさがほはひかゝり、玄のおまじりの忘草、瓢箪まげり空し、草顔淵が巷に滋し、藜藿深くとざせり。雨原憲が樞をうるほすともいひつべし。すぎのふきめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に争ひて、たまるべしともみえざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、世にたえぬ身のならひとて、うきふしまげき竹柱、都の方の言づては、間遠にゆへるませ垣や、わづかにこととふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つゝら、くる人稀なる所なり。法皇人やあるくゝとめされけれども、御いらへ申すものもなし。やゝありて老い衰へたる尼一人まゐりたり。女院はいづくへ御幸なりけるぞと仰せければ、この上の山へ花つみに入らせたまひて候ふと申

す。……やゝあつて上の山より、濃き墨染の衣きたりける尼二人、岩のかけちをつたひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇あれはいかなる者ぞと仰せければ、老尼涙をおさへて、花がたみ臂にかけ、岩つゝじとりぐして持たせたまひて候ふは、女院にてわたらせたまひ候ふ。つま木に薇折り具して侍ふは、鳥飼、中納言維實の女、五條、大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍の局と申しもあへず泣きけり。法皇御涙せきあへさせたまはず。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見え參らせんすらん耻しさよ、消えもうせばやと、おぼしめせども、かひぞなき。宵々毎の閑伽の水むすぶ袂もをるゝに、曉おきの袖の上、山路の露もまげくして、まぼりやかねさせたまひけん、山へも歸らせたまはず、また御庵室へも入らせおはしませず、呆れて立たせましゝたるところに、内侍の尼参りつゝ、花がたみをばたまはりけり。

**鎌倉中期以後。** 承久の役に官軍敗れて、鎌倉幕府の基礎はいよゝゝ堅く、これより京都は自由の念なく、希望の光を失

雜纂類にては鎌倉時代の初に古事談、宇治拾遺物語

等あり、前者は記事極めて乾燥、後者の記事の過半は今昔物語、古事談等より取りたり。

定家の子に爲家あり、爲家の子爲氏(二條)爲教(京極)爲相(冷泉)より三家に別れたり。

ひて、萎靡して振はず。關東の武士はもとより文筆に疎ければ、鎌倉時代中期以後の文學は見るべきもの少し。散文のやや見るべきは、十訓抄、古今著聞集等の雜纂類あるのみ。これらはいづれも平安朝の今昔物語等に倣ひて、古來のおもしろく珍らしき事實を輯めたるものにして、率直平易なる文體にてかきたり。

**歌道の門閥。** 和歌の衰へたるも散文に同じ。人心は漸次萎靡せるに、藤原俊成、定家二代相續いて名手の譽ありしより、歌道の勢力はすべてその一門に歸す。その子孫は二條、京極、冷泉の三家に別れて、互に反目せしが中に、二條家は嫡流として殊に榮え、歌集の勅撰も多くはその一門より出でしが、その家を尊くせんが爲に、種々の法式を設けて、子弟を束縛したれば、斯道は却りて日々に萎靡するに至れり。

## 二 南北朝

一九八〇頃より二〇五〇頃まで。

### 南北朝の概観

建武中興の業成り、幾ばくもなくまた壞れて、南北朝兩朝分争の世となりしが、政治の中心は關東より畿内に復せり。輦下の貴紳は懶眠より覺めて、更に政治にあづかり、文學も一時は希望を有し、活氣を生じたること、鎌倉時代のはじめの如し。戦うて利なきは憤慨の情を文筆に漏らし、亂離の變にあひては、人生の險に恐れ、隱遁の安を説く。これ南北分争の間、多く見るところなりき。

**頼阿**。和歌は黨同伐異の弊を受けて、微々として勢なかりしが、僧頼阿二條家の門に出でて、二條の中興と稱せられ、一時みなこれに靡く。歌風は穩和を主として、若ばく平凡に流れたり。

頼阿は二條爲氏の千爲世に學ぶ、その家集を草庵集といふ、關白二條良基頼阿に學びてまた和歌に名あり。

兼好は卜部氏、もと京都吉田社の祠官に出づ、後宇多上皇に仕へ、上皇崩御の後、出家したり。

當時また吉野拾遺の著あり、松翁の編するところ、南朝君臣の逸事を集む。

太平記は小島法師の撰なり、法師の傳詳かならず、應安七年歿せり。

**兼好**。僧兼好頼阿と親しく、和歌にも名ありしが、その不朽の譽は徒然草の著あるによれり。徒然草は脈絡なき隨筆にして、著者が閑靜の境を愛し、花月の美を愛して、悠悠自適、趣味を談じ、人情を説き、よく老佛の説を融化するを見る。文章暢達にして雅馴、世に枕草紙と併せて、隨筆の雙絶とす。

**北畠親房**。歴史には北畠親房の神皇正統記等あり。親房は南朝に仕へ、楠木、新田の諸將が戦死の後、ひとり王事に勵みて、國家の柱石たりしが、軍旅の間にも筆硯を捨てず。正統記は、著者が國事を慷慨して、古來の歴史を述べ、皇統の正閏を論じたるものにして、文章平直に、議論正大なり。

**太平記等**。源平の争鬪ありて、源平盛衰記等の作ありき、南北の戦亂ありて、こゝに太平記の長篇を見る。太平記は文體盛衰記より出でて、一層雄大にして絢爛なるが、やゝ華に過

ぐる嫌あり、體裁も整頓せず。その後、軍記の類にして見るに足るべきは、曾我物語、義經記等にして、次期にわたりての作なるべし。

### 三 室町時代

二〇五〇頃より二一五〇頃まで。

義滿の時、同朋觀阿彌及びその子世阿彌ありて、新曲を作る、これを作るといへど、かれらはその諸節を定めたるまでなるべし。その後續いて新曲の作あり、今日までも普通に行はるゝは凡そ二百番なり。謡曲の趣向は、幽靈顯はれ

**能樂と謡曲。** 室町幕府の世は戰亂相繼ぐ、されど三代義滿の頃はなほ幕府に威權あり、義滿遊樂を好み、能樂を興す。能樂は委しくは猿樂サルガクの能といふ。昔より神事に用ひたる伎樂なりしが、義滿に至りて、樂師をしてその他の舞樂をも折衷して、能樂を起さしめ、これに合せんが爲に、また新曲を作らしむ、この新曲は即ち謡曲ウタヒなり。これよりさき禪宗の行はれしより、僧侶の支那に渡航して、宋元の文化を傳へしこと少からず、義滿新たに明と交を修して、海外の交通や、

て往事を語り、高僧の同向によりて成佛すといふもの多し。

繁し。謡曲の文は、蓋し當時の僧侶の手になりたるもの多かるべく、結構は元の戯曲に出で、また至るところ佛教の思想を含む。詞句は、好んで古文辭を補綴すれども、よく諧和して、好調に富む。これより能樂流行して、武家の式樂の如くなり、新曲續いて出でしかど、千篇一律の嫌を免れざりき。

**狂言。** 能樂の餘興として、その間に挟み行ふものに、狂言あり。その技、能樂の嚴正なるに對し、滑稽を旨として、よく人の頤を解き、往々世情を諷刺したるところあり。その文は當時の言語をそのままに寫して、率直愛すべし。

謡曲八島の一節。

また修羅道の関の聲、矢さけびの音、震動せり。今日の修羅の敵は誰そ、なに能登、守教經とや。あらものくしや、手なみは知りぬ。思ひぞ出づる壇の浦の、その船軍今ははや、閻浮に歸る生死イミシの、海山一同に震動して、船よりは関の聲、陸には波の楯、月にまらむは、劍の光、潮に映るは、甲の星の影、水や空

ゆくもまた雲の波の、うち合ひさしちがふる船軍のかけひき、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より明けて、かたきと見えしは群れるる鷗、関の聲と聞えしは、浦風なりけり、高松の浦風なりけり、高松の朝嵐とぞなりにける。

**應仁の亂。** 應仁の亂起りては、京師も修羅の巷となりぬ。一

兼良は關白となり、三宮に准ぜらる。著述甚だ多し。その子關白冬良、また父について名あり。

條兼良名門に生れて、官位顯達し、博覽強記にして、また文學の才あり。亂を避けて地方に遊ぶ。その第内の文庫は藏書の富を以て名ありしが、兵火を免れしかど、兵士に毀たれ、幾百合の典籍、衢に落ち散り、誰收むるものもなかりきといふ。

**和歌の非運。** 和歌も日に衰ふ。京極、二條兩家ともに既に絶え、古今集以來連續したりし歌集の勅撰も、また遂に絶

勅撰集は後花園天皇の朝の新續古今集にて絶えたり。古今集よりこの集までを合せて廿一代集といふ。室町時代の武士にて今川了俊、大田

えたり。應仁の頃、東下野守常縁といふ武士、歌學の祕事傳授のうち、殊に古今傳授を重しとし、これを定めて僧宗祇に傳ふ。その傳授も淺薄にして附會なる説多く、かくの如きこと

道灌また和歌をよくせり。

を唱へてその道を貴くせんとしたる社會の窮狀は、むしろ憐むべし。

**連歌の流行。** 和歌に代りて大に行はれたるは、連歌なり。連

歌とは、短歌一首の半を一人がよめば、他の一人がこれに繼いでその半をよむものにて、もと一種の遊技に過ぎず。その起源は太古にありき。後鳥羽天皇の頃より、わけて和歌の餘興としてこれをもてはやし、一首のよみきりに止まらず、首尾相繼いで、二十句以上、千句にも及びたりき。南北朝に二條良基これを好みて、その式を定め、また勅撰に准じて、菟玖波集を撰したりき。蓋し連歌の技たる、深く精力を費やすものにあらず、干戈匆忙の際も、半日の閑を樂むに適すれば、ますます世に行はれ、應仁の頃、僧宗祇に至りて絶頂に達す。宗祇旅行を好みて詩才を養ひ、四方に流浪して定居なし。嘗て勅

良基は連歌新式の撰定ある外に筑波問答を著してその道を論じ、宗祇は吾妻問答を著す。

を奉じて、新撰筑波集を撰す。海内風靡して、斯道の宗と仰ぐ。門人に僧宗長、牡丹花宵柏最も名ありき。

水無瀬三吟百韻のうち。(連歌)

雪ながら山もとかすむゆふべかな、

ゆく水とほく梅にほふ里、

河風にひとむら柳春みえて、

舟さす音もゑるきあけがた、

月やなほきりわたる夜に残るらん、

霜おく野はら秋はくれけり。

宗祇 宵柏 宗長 宗祇 宵柏 宗長

#### 四 戦国時代

二一五〇頃より二二六〇頃まで。

當時の概観。 應仁以來、天下大に亂れ、皇室は窮乏の極に達して、節會大禮も行はれず、幕府は全く威權なし。京都は荒れて貴賤四方に離散し、諸侯はその領地に割據して干戈を事

戦国時代唯一の學校といふべきもの足利學校あり、これよりさき鎌倉時代に北條顯時金澤文庫を建てたりし

が、この時代には衰亡したり。足利學校は、南北朝の頃、足利基氏の興せるなり。

京都の五山は天龍、相國、建仁、東福、萬壽の五寺にして、南禪寺を五山の上といひ、妙心寺またこれに劣らぬ大寺なり。

とす。かゝる時、文學が衰微の極に達したることは、多言するを要せず。地方には、堺に細川氏、三好氏、山口に大内氏、小田原に北條氏ありて、わけて勢強く、文藝に長けたるもの一時遁れ來りて、これらの地に住みたりき。

文學の衰微。 鎌倉時代以來、禪僧の支那に往來して、かの國に學び、詩文をよくするもの少からず。戦國の世、文物の衰滅に近き時、漢文學の命脈を保てるは、禪僧にして、殊に京都の五山はその淵藪なりき。和歌、國文の衰へたることもまた甚し。連歌はさすがに無學のものも作ることを得れば、盛に行はれて、武人が戰場消閑の技として用ひられたり。

平民文學。 文運かくの如く慘澹たれども、都鄙の懸隔減じ、貴賤の階級壞れたれば、京師の貴族等が文學を獨占したる風も、共に失はる。武人に和歌をよくするものあり、和歌より



御伽草紙のうちに  
ては文正、鉢かづ  
き最も世に知ら  
る。舞の本もまた  
その頃大に行はれ  
たり。

も連歌の行はれたるなど、いづれもこの傾向を示せるなり。されば江戸幕府の世に盛なる平民文學の曙光も、既にこの時に現はる。御伽草紙とて、童蒙の訓誨に資すべき小説の類は、この頃の作多かるべく、淨瑠璃即ち戯曲の起源もこゝにあり。山崎宗鑑、荒木田守武が好んで連歌の俳諧體を詠じ、卑俗滑稽を旨としたるは、俳諧のはじめにして、連歌の一句十七字を全詩として詠ずることも、またこの時代に起れり。

#### 第四章 江戸幕府の世

**文學の普及。** 江戸幕府の世は、泰平うち續きて、文化の進歩前古に比なし。ひとりこれに對比すべき平安朝の文化も、貴族が占むるのみにして、庶民は與らざりしが、この時代はこれに異なり。學問藝術上下に涉りて、四民ともにその徳を享

け、文學の滋味も弘く世に味はるゝに至れり。

**文學の階級。** されど幕府の施設漸く成るに従ひて、戰國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、従うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を玩び、彼は學問を喜び、此は戯曲小説を愛し、彼は古文を墨守して、固陋に流れ、此は新作に傾倒して、卑俗に陷る。學識あるものは、新興の文學を卑み、新興の文學に就くものは、みづから低うして、高尚なる趣味を解せず。かくて戯曲小説の如きは、戯作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。

**儒教の勢力。** この時代に著しき思想界の現象は、儒教が佛敎に代りて勢力を得たることなり。佛敎の上下を通じて普く行はれたることは變らずといへども、僧侶は漸く安逸に

この時代の戯曲小説類は多く題目を鎌倉、室町時代に取る。源義經の一生、曾我兄弟の復讐の如きは殊に邦人の武士的觀念に適合し、既に室町時代より盛に著作の材料となりたり。

馴れて、布教を怠れり。この時、儒教は勃然として興り、力めて修身齊家の道を唱へしかば、世人を導いて文化の域に進ましむるもの、今は佛よりも儒なり。國學の新たに起りて、わが國固有の道を明めんとしたることも、また注意すべし。  
**武士道の勢力。** 殊にこの時代の人心を支配したるは武士道なり。武士道は日本固有の廉潔尙武の精神に、人倫五常の別を明かにする儒教の意と、信仰を本として生死を離るる佛敎の旨とを折衷し、これを古來の戦亂に鍛へて成りたるものにして、この時代に至りて内容形式共に備はり、武士はこれを以て造次にも忘るべからざる大道とす。その朴直を守りて、浮華を斥け、感情を卑みて、義理に進み、婦人を輕んずるは、著しく平安朝に相違せる要點にして、また武事を偏重するより、時に殺伐に流るる弊なきにもあらざりき。

一 寛永時代

二二六〇頃より二三四〇頃まで。

**偃武後の趨向。** 徳川家康國內を一統して、四民はじめて泰平の化に浴す。家康性極めて慎重、馬上に天下を得たりといへども、馬上にこれを治むべからざるを知りて、文學の興隆に志す。命じて散亂せる書籍を集め、必要なるは活字を製して版行せしむ。世既に靜謐に、またこの奨勵あり、寛永の頃に至りては、衰廢せし文學も、漸く復興の運に向へり。

**朱子學の勃興。** 文學復興の魁たりしは漢學なり。されど久しくうち續きし戦亂の後を受けては、いまだ詩文に心を潜むべき餘裕なく、有識の士は寧ろ儒教によりて、社會の秩序を回復せんとしたり。かくて儒教の興隆に功ありしを藤原惺窩、林羅山とす。家康の京都にあるや、老ばく、惺窩を延い

惺窩は冷泉家に出で、定家の裔なり、はじめ佛門に入りしが、轉じて

儒者となる。羅山は雅髪して道春といへり。

て經史を講ぜしめしが、多くは辭して出でず、門下の俊才、羅山を薦む。羅山は家康の聘に應じて、江戸に來り、律令制度の改定に參與して大功あり。これより子孫代々、儒を以て幕府に仕ふ。この二人が奉ぜしは宋の朱熹の學なり。朱學は既に南北朝の頃よりわが國に傳はりしが、惺窩、羅山等出でてより大に世に行はるゝに至れるなり。

藤樹は近江聖人と稱せらる、その藤樹書院今に存す。闇齋ははじめ朱子學を野中兼山等に學ぶ、兼山は土佐侯に仕へて治績あり。

**其他の學派。** 朱子學の外に陽明學も行はる。近江の人中江藤樹、明の王陽明の學説を奉じて、實踐躬行を勵み、好んで孝經を講ず。近隣その徳に服して、みな善に移れりといふ。熊澤蕃山これに學び、備前侯に仕へて治績あり。儒教かくの如く行はれて、その社會における感化は、今や佛教の及ぶべきにあらず。神道には、從來、佛教思想を以て説をなししもの漸く衰へ、山崎闇齋が朱學の説によつて垂加神道を立てて、世に

和歌に巧なる人、幽齋と同時、木下勝俊あり、幽齋の門人に中院通勝、烏丸光廣等あり。

貞徳の俳諧の式を立てたるは、その著御傘にあり、門人に野々口立圃、松江重頼、安原貞室等あり。宗因は重頼に道をきいて更に一家を立てたるなり。

用ひられしが如き、よく儒佛二教が勢力の消長を示せり。**歌道の授受。** 和歌において、戦國とこの時代との過渡の人は細川幽齋なり。幽齋は武人にして、諸藝に通じ、殊に歌道を傳へて、大に世に重んぜらる。幽齋に學びたるもの、公卿にもその人少からざりしが、いづれも古來の弊風を墨守せるに過ぎず。ひとり地下に松永貞徳がまた幽齋の傳授を受け、その道の中流以下の人に弘めたる功を多とすべし。

**俳諧の勃興。** されど貞徳の主功は和歌よりも俳諧にあり、貞徳は京の人、始めて俳諧の式を定め、これを連歌より獨立せしむ。門人頗る多く、江戸幕府の世に、俳諧の興りて、連歌の廢れしは、實に貞徳の唱道によれり。されどその作なほ幼稚なり、この一派を古風と稱す。ついで西山宗因大阪に起り、舊格を打破して、放縱なる一體を創む。これを檀林風といひて、

また一時大に行はれたり。

まをるゝは何かあんずの花の色

貞徳

雪月花一度に見するうつきかな

同

世の中や蝶々とまれかくもあれ

宗因

まら露や無分別なるおきどころ

同

**訓蒙平易なる文學。** 概するに、この時代は、文學復興の運に

向へりといふまでにて、いまだ旺盛の時至れるにあらず。新作の書も、多くは訓蒙諺解の類なり。小説の類も、假名草紙といひて、御伽草紙より僅かに一步を進めたるものの、訓誨を旨とせるが多かりき。

假名草紙の作者には鈴木正三、淺井了意等名あり。

## 二 元祿時代

二三四〇頃より二四〇〇頃まで

**元祿時代の盛運。** 泰平久しく、生活豊かにして、こゝに元祿時代の盛運は來れり。中古以來の文學は、その思想、用語共に

舊習に縛せられて、狭小なる局面に逡巡するのみなりしに、今や先例の桎梏を脱し、直ちに自然と人生とに接して、自在に事物を研究し、感想を述ぶるに至れり。

**儒者の輩出。** 將軍綱吉漢學を好み、屢、儒者を集めて、經義を討論せしめ、またみづから經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘す。かくて漢學頗る熾に、學者一時に輩出す。林家には、羅山の孫鳳岡幕府に信任せらる。木下順庵は京の人、のち江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に新井白石、室鳩巢等、著名の士多し。伊藤仁齋京に起り、朱子學は孔孟の古意にあらずとして、別に古學を立て、その子東涯博覽にして、よく父の學を祖述す。荻生徂來江戸にあり、また朱子學を駁して、古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙せり。

**益軒と白石。** 筑前の士貝原益軒も當時の碩學なり。性謙讓

順庵ははじめ加賀侯に仕へ、のち幕府に聘せらる。仁齋は京堀河に私塾を開いて教授す、門生無慮三千人といふ。徂來は柳澤氏に仕へたり。

益軒の著には文訓、武訓、樂訓、童子訓等あり、白石は古史通、讀史餘論、藩翰譜、折たく柴の記等を著せり。

水戸の修史に與れるものには安積澹泊、栗山潛鋒等知名の士多し。

當時多くの國文註釋書を編して初學に便を與へたるを北村季吟とす、季吟は貞徳に學ぶ、源氏物語湖月抄、

にして、博識を銜はず、書を著はずや、概ね平易懇切にして實益あらんことを期す。江戸の新井白石は將軍家宣及び家繼に仕へて、政務に參與す。學博く識高く、有益の著多く、行文犀利にして、透徹せざるところなし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。

**水戸の學問。** この時代において、和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川光圀とす。光圀は家康の孫なり、明の遺臣朱舜水を聘して、學を講ぜしめ、また修史の念篤く、彰考館を開き、儒臣をこゝに集めて大日本史を撰せしむ。その學の重んずるところ、大義名分を正すにありき。

**國文學の勃興。** 光圀古典の研究に志あり、殊に萬葉集の解し難きを遺憾として、その註釋を計る。時に大阪に下河邊長流あり、古文に通じ、中古以來の僻説を捨てて、先人未發の見

枕草紙春曙抄等今に行はるゝが、從來の説を纏めたるまでにて、新しき研究あるにあらず。江戸には戸田茂睡始めて歌道の革新を唱へしが、いまだ大なる反響なかりき。

春滿は山城稻荷神社の祠官なり、幕府に請うて、伏見に國學校を起さんとせしが、成らざりき。

を立つ。光圀の依託を受けて、かの註釋に従事せしが、終らずして歿し、釋契沖その業を繼ぐ。契沖は眞言宗の僧にして、國文學を好み、造詣至りて深く、識見世に絶す。その著述少からざるが中に、學界に大影響を與へしは、萬葉代匠記と和字正濫抄となり。代匠記は即ち光圀の囑に應ぜしものにして、偉大なる奈良文學はこゝにはじめて闡明せられたり。正濫抄は、中古以來、假名遣の誤れるを正せる書なり。

**春滿の國學。** やゝ下りて享保の頃、荷田春滿あり。深く國史律令に通じ、從來古書を説くものの佛教或は儒教の意を迎合せるを非とし、國民が固有の性俗を明むるを以て、己が任とす。いはゆる國學とて、古典を究めて、國體のあるところを學ぶは、この人に起れるなり。幕末の際、勤王攘夷の説の沸騰せるは、水戸の學と國學との感化、與りて力ありき。

桃青の門人中、其角は江戸にありて江戸座を起し、嵐雪も江戸にありて雪中庵と稱す、森川許六は彦根に、向井去來は京に居り、東花坊支考は美濃風、岩田涼菟は伊勢風を開く。

芭蕉の俳諧 學問の方面における文運の進歩は、凡そかくの如くなるが、純文學の發達は更に著し。俳諧には、伊賀の人松尾桃青(芭蕉翁)京に出てて、北村季吟に學び、のち江戸に來りて、正風を起し、また東西に周遊して、その風を擴む。蓋し從來の俳諧は、内容の見るべきものなく、多くは措辭の上に滑稽を弄するに過ぎざりき。桃青起るに及びて、その地位を高くし、造化の祕を發くを以て歸趣とす。詠ずるところ、人事よりも自然に多く、幽玄清淡にして、廣く雅俗にわたる。四方翁然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はる。門人には豪放なる榎本其角、溫和なる服部嵐雪をはじめて、俊秀の士諸國に多かりしが、師歿して後は、各その好むところによりて説を立て、彼此對立して統一を失ふに至れり。

ふる池や、蛙とびこむ水のおと。

桃青

荒海や、佐渡によこたふ天の河。

聲かれて猿の齒しろし、峯の月。

梅一輪、一輪ほどのあたゝかさ。

同

其角

嵐雪

西鶴は大阪の人、宗因に學んで俳諧をよくせしが、のち移りて小説を作れり。その後、京の書賈八文字屋自笑また江島其磧と力を合せ、西鶴に倣うて小説を作れり、いはゆる八文字屋本なり。

浮世草紙。 戲曲小説は殊に急速なる進歩をなしたるが、その作多くは大阪に出づ。この地は商賈の占むるところ、この時代に至りて豪富の商賈多く出で、町人も社會におけるその勢力を自覺して、こゝにその間に行はるゝ文學は開けたるなり。されどこれらの階級には儒教及び武士道の制裁も薄ければ、その文學もおのづから趣味低くして、輕佻浮華の風を帯びたり。小説は井原西鶴出でて、いはゆる浮世草紙を作る、文章輕妙奇抜にして、法格に拘はらず、寫實的に社會の表裏を描き出せり。

戲曲の全盛。 戲曲は謠曲等より出で、江戸幕府創立以前よ

門左衛門は大阪に移りてのち、竹本義大夫の爲に多くの戯曲を作れり。次期に至りて戯曲は大に衰へ、近松半二など回復を計りしが意の如くならざりき。

り既に行はれしかど、なほ拙劣なるものなりしが、この時代に至りて隆盛を極む。元祿の頃、近松門左衛門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に戯曲を作る。寫すところ人情の祕奥を穿ちて、才藻湧くが如し、その作百種の外に出づ。ついで竹田出雲あり、文才は門左衛門に及ばずといへども、趣向の變化に富めることは却つて勝り、今日もなほ行はるゝはその作に多し。

曾我會稽山の一節

門左衛門

ひつたてんとする所に、五郎時致何としてか見つけけん、坂を下りに駈け來り、列卒の兵五六人、ひつつかんで手鞠の如くうちつけく、團三郎が繩も皮もひきちぎり、八幡、四郎をはたと蹴倒し、どうとふまへ、梢もゆるぐ大音にて、鹿の皮かづきし人を鹿と見るは、おろかの眼力、曾我、五郎時致は、形は人にて魂の鹿をよつく見る、鹿こそ通れ、十郎殿、おりあひたまへ」とよばはれば、祐成つゝいて走りつき、兄弟揃うて珍しき對面と、太刀の柄に手を

かくれば、祐經が郎黨、主をうたすな、餘すなと、二重三重にかけへだて、ひつつゝんで、たち騒ぐ。團三郎割つて入り、ア、く、且那、兪忽なされな、今日のお命團三郎が預かる。御一生の大事の御使、古郷の御老母、一昨日の夕暮より、にはかの御病氣、次第に重り、唯今も測られず、千に一つも御本復あるまじき御覺悟、今生の名殘、兄弟に一目對面せん、萬事をふりすて、たち歸れ。これに背かば、時致はもとの如く、十郎もろとも生々世々の勘當と、たえく、弱る御聲を聞きすて、駈けつけし」と聞くよりはつと力も落ち、兄弟目と目を見合せて、寢ぬに夢みるこゝちなり、ア、御思案どころでなし。京の小四郎の不所存人さへ、ひつ添うて看病、この人にお二人が孝行劣りたまひては、冥途までの御恨、天の冥加も恐ろし、祐經殿に和を乞うて、おたちく」と勸むれば、祐經おほきに力を得、これく、兄弟、父の河津は流矢に中りしとも、侯野、五郎が討ちたりとも、分明ならぬ親の敵、さしあてて祐經を狙ふとなよしく、さもしげにいひわけはすまじいぞ。サアうちかけよ、きりかけよ、音にきく程にもなし、怯れたか、曾我殿原」と足もと見たる廣言、五郎たまらず、神妙候ふ、祐經」と踊りいづるをおしといめ、母の便を何ときく、狂亂

か弟、「いや〜〜微塵こつばいになればとて、敵に聲をかけられ、すこ〜  
 たつては骸の恥辱、放されよ、十郎殿。」ヤイ身の譽も恥もすて、娑婆と冥土の  
 父母を喜ばせ奉らんと、幼少より今日まで兄弟が念願はや忘れしか、時致。  
 「ハッアさうちや、エ、残念至極、くちをしい、祐成殿。」無念な時致。あさましき  
 會我の運命や。」と涙の齒ざり身をふるはし、握りひしぐ太刀の柄、ぬきかけ  
 ぬきかけ、はつし〜と鏑打は、鏑切羽も一時に碎けちるべう見えてけり、  
 ……………母のいたはり心ならず、參會は重ねて。」と立たんとすれば、暫く〜。  
 孝行のほど感じいる。祐經も一家の端外のやうには思はず、北海道は遠け  
 れば、山路の近道いそぎのため、某が祕藏の名馬、狩場まで引かせしを、兄弟  
 に餞別せん。外道鶴毛、婆羅門栗毛、これへ〜。あつ。」と答へて引きいだす、そ  
 の長八寸あまり、肉十分に節高く、沛艾に口こはく、乗入もせぬ野鬚の馬、一  
 様の鞍、皆具、遣繩、追繩、口取繩、つらを振れば、六人の舍人もよろめきひつた  
 てられ、前脚かいて齒をたゝき、人を嚇して鼻嵐、鬣よりもるゝ眼の光、角な  
 き鬼の如くなり。兄弟きつと目くはせし、必定この馬に駆け落させ、殺すか、  
 不具か、恥か、せん謀、辭退せばなほ恥辱と、……………ひるむところを引きよ

せ、ひらりとうちをつて、兄弟鎧ふんばつて、銜を並べひかゆれば、祐經案に  
 相違して、唯うつかりと大口をあきれば、ててぞ見えにける。祐成勇めば時  
 致きほひ、ヤア〜團三郎、汝はこれより秩父殿、和田殿、そのほかの方々へ  
 一禮申して、假屋をまへ。サア來い、五郎、「いざござれ、十郎殿。」と一鞭くれて  
 のり出すも、日脚も速き午未、わが身の運も上刻と、八卦うらかた八響、鐘  
 にさそはれ風さそふ、朽木の櫻春すぎて、また何時の世の花をだに、待つに  
 かひなき會我の里。いたはしや母上は、河津に別れしゆふべより、二十餘年  
 の物おもひ、貧しき上に世をしのぶ、兄弟の子の成人を、急ぐは親の老と死  
 を、急ぐと知らで身につもる、雪をれ松のむすをれに、にはか病の萬死の床、  
 たのしみは似ぬ孫長が、藁屋の紙帳もりくる風、そよと寝がへり息つぎも、  
 今を限ときこえけり。

三 寶曆前後

二四〇〇頃より二四五〇頃まで。

文運東遷。幕府の創立と共に、政權は江戸に移りしが、人文



の發達は直ちにこれに伴はず。前期までは、江戸にも著名の文學者はありしが、なほ少數にして、概するに文學殊に純文學の中心は、京阪にありき。よかるに形勢は漸く移り、この時代は即ち文運東遷の過渡期にして、次期に及びては、榮枯處をかへ、京阪は全く江戸に及ばざるに至れり。

**國學の傳播** 文運の東遷に力ありしは、荷田在滿、賀茂眞淵を主とす。在滿は春滿の甥にして、制度の學に委しく、江戸に下りて家學を弘む。當時、將軍吉宗の子徳川宗武、國學を好み、學者を聘す。在滿これに仕へしが、その説宗武と合はず、辭して眞淵を以て代らしむ。眞淵は遠江の人、京に出てて春滿に學び、のち江戸に來りて講説し、宗武に仕ふ。その學は春滿に繼いで、わが國固有の道を明かにするにあり。謂へらく、むかし儒佛の教の傳はりしより、古道はこれがために廢れぬ、

宗武は田安家と稱せらる、また和歌をよくす。在滿には國歌八論等の著あり、眞淵には萬葉考、冠辭考、祝詞考、國意考、歌意考等著述多し。

故に古道を明めんとせば、外國の影響なくして、人意の自然に出でたる古書を學ばざるべからず、その古書は萬葉集最も善しと。よりに深くこの書を究む。識見甚だ高しといへども、詩文の才は寧ろ學問にまされり。たゞ萬葉風の古文辭を用ひて、却つて技能の發展を妨げしを、憾むべしとす。門下に高材の士多くして、これより國學の勢天下を席卷するに至れり。

**京都の情況** されど京都にも、なほ國文學に名ある人少からず。小澤蘆庵は和歌に長じ、眞淵に反して、平語を用ひて、清新の調をなす。富士谷成章は文法に通じたり。

富士山をよめる長歌一首及びその反歌。

眞淵

磯間よりそがひに見ゆる、駿河の海、沖つ波路はせばきかも、ふりさけみれば相模嶺の、八重山峯は低きかも、天の原なる富士の嶺の麓をいでて、風の

當時京都にて伴蒿隱また歌文に名あり、成章の子御杖も一家の見を立てたり。

まに横ほる雲に、駿河の海、沖もかくろひ、相模嶺の峯も雨ふり、時のまに雷もなりゆけど、六月のてる日の空にあらはれて、曇るともなく、常夏に雪ぞふりける、富士の高嶺は。

駿河なる富士の高嶺は、いかづちの音する雲の上にこそ見れ。

富士の嶺の麓をいでてゆく雲は、足柄山の峯にかゝれり。

當時の短歌の例。

信濃なるすがの荒野にとぶ鷺の、翅もたわにふく嵐かな。

真淵

大堰川、月と花との朧夜に、ひとりかすまね浪のおとかな。

蘆庵

**俳諧の革新。** 俳諧は都鄙にわたりて廣く行はるゝにつけて、時好に投じ、風調甚だ卑俗に流る。天明の頃更めて清新の風を詠ぜしもの起れるが中に、谷口蕪村を最とす。蕪村好んで自然の景物を詠じ、また漢詩の趣を交ふ、桃青と相竝んで、斯道の二聖とすべし。横井也有は殊に俳文をよくして、淡雅輕妙なり。その後、俳諧なほ遍く行はれしが、漸次俗了しゆく

蕪村は攝津の人、京に住む、また畫をよくせり。也有は尾張侯の臣、その俳文集鴉衣世に行はる。

のみなりき。

ほととぎす、平安城をすぢかひに。

蕪村

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな。

同

**戯曲小説。** 戯曲小説は、京阪の間には見るべきもの少く、江戸には、青本といふ小説漸く發達し、兒童の玩具より進んで、世態人情を穿つに至れり。されど文學上の價值より見れば、數多き青本の作よりも、寧ろ上田秋成、建部凌岱を重んずべし。二人はいづれも國文學の知識を基礎とし、漢文學をも折衷して、小説を作る。平賀鳩溪また奇才を抱いて世に容れられず、戯曲戯文を綴りて悶を遣りたりき。

四 文化文政時代

二四五〇頃より二五三〇頃まで。

**松平定信。** 元祿は京阪の文華の燦爛たる時代にして、文化

秋成は京阪に放浪し、凌岱、鳩溪は江戸に住めり。秋成の兩月物語最も世に知らる。

文政は江戸の最も光彩ある時代なり。文學に大功ある人、彼に徳川光圀あるが如く、此に松平定信あり。定信は徳川宗武の子なり、將軍家齊立つに及びて、老中となり、のち致仕して樂翁と號し、文學を樂みて晩年を送る。その政を執るや、力めて風紀の振肅を計り、道德的觀念を以て、學問文學を律したり。

折衷學は井上金  
峨、山本北山、大  
田錦城等これを唱  
へたり。官學は即  
ち昌平坂學問所な  
り、述齋を佐けて  
これを經營せるも  
の、柴野栗山、古  
賀精里、尾藤三洲  
あり、世に寛政の  
三學士と稱す。

**異學の禁。** 儒教においては、林家代々、幕府に仕へて、朱子學を立つ。この學に抗して、さきに古學、古文辭學は出でしが、その後また折衷學も起り、黨を分ちて相争ふ。定信黨同伐異の俗が風教に害あらんことを患へ、林家の私學を幕府の有とし、林述齋をしてこれを統べしむ。また朱學を奉ぜざるものは、官職に就くことを得ざらしむ。これを異學の禁といふ。  
**東西の風潮。** 寛政より文化、文政の頃までは、江戸の繁華絶

宣長は松坂の商家  
に生れて、その地  
に住む、博覽を以  
て鳴り、著述甚だ  
多し、隨筆玉勝間  
など殊に世に重ん  
ぜらる。

頂に達し、市民は泰平の化に浴して、擊壤鼓腹す。よかるに京都はこれに反して、皇室は幕府に壓せられ、攝關清華の家も貧しくす。こせば、國學の開けて、古代王朝の盛大を知るにつけても、當今の非運を慨せざるを得ず。この形勢の相違はさながら文學に影響し、江戸の文學は泰平を謳歌して、不平の念の見ゆること稀なるに、關西には、頼山陽の如く、鬱勃の情禁じがたく、尊王愛國の主義を鼓吹するもの少からざりき。』  
**本居宣長。** 賀茂眞淵起りてより、國文學の勢盛に、殆ど漢文學を壓す。その門人多きが中に、關西の本居宣長、江戸の加藤千蔭、村田春海等最も名ありて、その學風の異同はまた東西の形勢の相違を示せり。本居宣長は伊勢の人、その學一に古道を明むるにあり。古道を知るには、古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に従事し、三十五年を歴て業成る。即ち古事記

篤胤は秋田の人、江戸に住む、晩年幕府に忌まれて國元に送られたり。

千蔭の家集をうけらが花といひ、春海のを琴後集といふ。

傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを知るべく、實に契沖の萬葉代匠記と併せて、江戸時代國文學界の二大作家なり。宣長なほ多くの著述あり、殊に文法に通じて、詞の玉の緒等を著はす。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子平田篤胤最も名高し。篤胤の唱ふるところは、宣長より一步を進めて、古道を以て一の宗教とし、これを弘布して儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の説は、これらの論によりてますます刺戟せられたり。

**千蔭、春海。** 加藤千蔭、村田春海は共に江戸の人、歌文をよくすれども、學問は宣長の博きに比すべくもあらず。千蔭は萬葉集略解の著を以て著はれ、春海は漢文にも併せ通じ、和漢の文を折衷して一體をなす。この二人が詠ずるところの和歌は、その師の如く萬葉の調にあらずして、むしろ古今に則

れり。

**塙保己一。** 江戸は日本一の都會となりて、珍品奇什こゝに集まれば、書籍もまた求めやすし。されば生活の豊かなるに安んじて、圖書を蒐集し、訓詁考證に専らなる學者も少からず。盲人塙保己一は眞淵の門より出づ。幕府に建議して和學講談所を設け、古書を集めて、群書類從及びその續篇を編したり。

**江戸の狂歌。** 狂歌は詞の卑俗に想の滑稽なる短歌なり。既に萬葉集に滑稽の歌あり、それより往々これを詠ずるものあり。江戸幕府の世に入りては、殊に行はれたりしが、前期の末よりこの時代にかけて、江戸の泰平はその振興を促がし、狂歌師一時に江戸に輩出す。中にも四方赤良最も滑稽の才に富み、戲謔口に任せて出でたり。

赤良は大田南畝にして、近世の雜事に通じたる學者なり。その門人に宿屋飯盛、北川眞顔また狂歌をよくす。飯盛は石川雅望といひ、國文學に通じたり。

景樹は貫之を崇  
び、その著に古今  
集正義、土佐日記  
創見等あり、家集  
を桂園一枝とい  
ふ。門人に熊谷直  
好、八田知紀(トモ  
ノリ)等あり。

京都の和歌。 翻りて京都を見るに、文壇頗る寂寥なりといへども、なほ香川景樹の歌道を一新したるあり。景樹は鳥取の人にして、京に住む。その説、小澤蘆庵に近く、意は古の誠實なるに倣ひ、詞は今の通じやすきを取り、殊に聲調を重んずるにあり。景樹の號によりて、その一派を桂園派といひ、大に世に行はれたり。

當時の短歌及び狂歌の例。

まきしまの大和心をひととはば、朝日にはふ山櫻ばな。

宣長

二見潟、こちふく風に明けそめて、神代のまゝの春は來にけり。

千蔭

心あてに見し白雲は麓にて、思はぬ空にはるゝ富士の嶺。

春海

大堰川かへらぬ水にかけみえて、今年もさける山櫻かな。

景樹

埋火のほかに心はなけれども、むかへば見ゆる白鳥の山。

同

時鳥なきつる跡に、あきたる後徳大寺のありあけの顔。

赤良

江戸の小説。 江戸には、小説勃興し、作者輩出せるが中に、山

京傳、馬琴は讀本  
(ヨミホン)に名を  
得たり、讀本の行  
はるゝに至りて、  
小説も高尚なる境  
に進めり。京傳の  
讀本には稻妻表  
紙、本朝醉菩提等  
あり。

一九の作は東海道  
中膝栗毛、三馬の  
は浮世風呂最も名  
あり。

東京傳早く許多の作を出して、名聲一時に鳴る。曲亭馬琴ついで立ち、學問該博にして、文藻絢爛なり。椿説弓張月、里見八犬傳等、その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる毎に、世人争うてこれを求めて、及ばざらんことを恐る。時に前期より享保の振肅も弛みて、世風漸く浮華侈奢に流れしかば、執政松平定信等これが矯正に力めて、文學の風俗を壞り、時事に渉るものを制す。一時これが爲に罪を得るものあり、京傳もその數に漏れざりしが、ひとり馬琴は謹嚴にして高く居り、その小説も一に儒教によりて勸善懲惡を旨とせり。その他の作者のうち、殊に滑稽に名を得たりしは、十返舎一九、式亭三馬なりき。

小文吾諷諫して高く舟水を論ず。(里見八犬傳のうち)

引かれて對牛樓にうち登れば、常武は婢兒等に兩戸おちなく開かせたり。

當下、小文吾はまづ頭を回らして、彼此と見かへるに、樓上の東面には、宿一山が款印ある、對牛彈琴といふ四大字の額を掲げて、左右には、唐の王勃が蜀中九日の詩を白字に鏤りたる竹聯あり。時は今、夏と秋との違あれども、犬田が爲には、こゝも亦望郷の臺にして、北地よりくる鴻雁はなけれど、いざ言とはんと詠まれたる都鳥は今もありけり、かくて欄干に身を倚せて、つくぐと見わたせば、天ははやあけし横雲の色、紙めきたるに筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、前面に黒き牛島は、宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き柳島は、絲よる濤に靡くに似たり。世間は何に譬へん朝びらき、趾なき如と満誓が詠みたる歌は、えら波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕ぐあり、西に歌あり、葛西村落幾戸の烟、南に沖つあり、北に滅ゆるあり、鎌田、浮田、行徳の浦々、あれかとぞ思ふ目も、迥に、登る旭をふる里の方とし見れば、翁さびし、父のうへ又親戚のこと、胸に湛へてながらふる、かひこそなけれ、劔刀、身を浮橋の中絶えし、この石濱の玉塵より、敷しつもれる艱難憂苦の、やるせは絶えてなかりけり。常武これを慰めて、犬田殿、々々々、いつまで物を思ひたまふぞ。尺蠖の伸びんとする時、まづその身を縮むといへば、窮達時あり、

運によるべし、あれあの船を見たまはずや、久しう水際に繋がれたるあり。又眞帆あげて走るあり、繋ぎし船は走るべからず、走る船は留まりがたし。和殿が今の滞留も、只この理をもて悟るべし。これをわが上に譬へていはば、君は船なり、臣は水なり、水はよく船をうかべて、又よく船を覆す。自胤は暗愚の弱將、菽麥をだも辨へ得ざれば、いかでか和殿を知るものならん、かの隣國なる敵の爲に滅ぼされんこと疑なし。某も亦千葉の一族、馬加光輝の姪なれば、代つて取るとも、誰か咎めん。されば享徳の例に倣うて、自胤に詰腹切らせ、わが兒鞍彌吾常尙を當城の主にせばやと、思はざるにあらねども、いまだ智勇の軍師を得ず。和殿今よりわれを佐けて、事成る時は、葛西の半郡を宛て行ふべし。うけひかれんやと、小膝を進めて、また他事もなく聳けば、小文吾聞きて貌を改め、こはおもひがけもなき密議を談せらるゝものかな。某素より學問せざれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取りて利害を推さん。貴所は只水と船との反覆を説きたまへども、順逆の理に暗きにあらずや、いかにとなれば、水の船をうかむるは、經なり、その船を覆すは、變なり。苟しくも只その變を己が利として、その經を取らざるものは、亂臣

賊子の心なるべし。君臣禮あり、舟車に楫あり、君臣禮を失ふときは、舟車に楫を失ふが如し。一旦その利を得るといふとも、滅亡せんこと疑なし。その君を弑せしもの、誰かその久しきを保ちたる。希望コヒカガくは非義の妄想を除き去りて、千葉家の諸葛といはれたまはば、徳誼後世に芳流して、子孫餘慶を承くることあらん。某武藝を好めども、短才にして文學なし、いかでか人の佐となるべき。只その志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ、念するの外は候はずと、憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と怒は面に見はれても、手を又きて物いはず。

**幕末の衰勢。** 嘉永以後は、幕府勢を失ひて、列藩これに服せず。歐米諸國志きりに開港を迫り、志士諸國に奔走して、勤王の論と佐幕の説と相争ひ、世の中甚だ騒がしく、人心恟々たれば、文學の見るに足るものなし。かゝる中に明治維新の世は來れり。

## 第五章 明治の世

二五三〇頃より。

**階級の破壊。** 明治の維新は未曾有の改革にして、社會のあらゆる事物は非常なる變化をなせり。その種々の變化のうち、まづ一世を聳動せしを、階級制度の破壊とす。職業の世襲は止み、四民は平等にして、たゞその才能によりて進めば、文學に於ける上下の區別も消失せざるを得ず。上流社會に根ざせる保守の弊は失せて、前代には中流以下にのみ玩ばれし俳句、戲曲、小説の類も遍く貴賤の間に行はれ、高尚なる文學の品位は始めて明かに認めらるゝに至れり。

**歐米文化の移植。** 維新の改革は歐米文化の移植によること多し。太古以來久しく儒佛二教の感化を受け、社會はこれが指導の下に立ちて進歩し來りしが、今や翻然として東西

兩洋の優劣を知り、力めて優秀なる西洋の文化を學べば、國民の思想は諸般の事物と共に、その影響を被れり。  
**國民性の發揮。** ちかれども現今の文運の進歩は、決して外國の事物を移植するのみによりて成れるにあらずして、その本づくところは、國民が己の能力を自覺し、發揮したるにあり。悠久なるわが歴史は、その民の智能を育成して、深く蘊蓄するところあり、またよく物の本末を辨へ、漫然たる摸倣の益なきを覺らしむ。かくしてわれらは國民の特性を基礎とし、外國の文化の長短を取捨して、これを彩り飾れるなり。』  
**形式の改善。** 國民の自覺と外國文化の折衷とによりて、われらの思想は著しく進歩し、文學もこれに伴うて、その形式は内容と共に大なる變化をなせり。國文學と西洋文學と併せて研究せられ、文字の改革を論ずるものあり、言文の一致

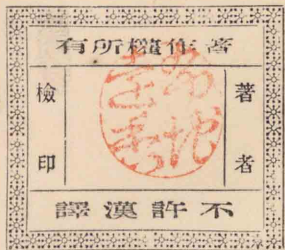
を唱ふるものあり、新進氣鋭の士は從來の歌文の陳套なるに飽きて、新體を試みるもの多く、文壇は漸次隆昌の度を加ふるに至れり。

**國文學の前途。** 現代における文學の景況、凡そかくの如し。維新以來、新たに覺醒したる國民は、まづ衣食住の改善に忙はしく、工藝に勵み、交通を便にするなどのことに急にして、文學の進歩はやゝ緩やかなりきといへども、今や文物日に進み、人心に餘裕を生じて、國民は漸く高尚なる文學を享樂せんことを思ふ。かくしてわが帝國が東西兩洋の文學の二大潮流を融化し、光輝ある文學を以て、世界に雄視せんとする氣運は、正に迫れるなり。



新體日本文學史教科書終

明治卅七年七月十一日印  
明治卅七年九月二十日訂正再版印刷  
明治卅七年九月廿三日訂正再版發行  
明治四十年十二月十一日修正第三版印刷  
明治四十年十二月十五日修正第三版發行



著者 發行所 印刷者 發行所 販賣所

藤岡作太郎

東京市小石川區小日向水道町七十三番地

西野虎吉

東京市京橋區築地三丁目十一番地

野村宗十郎

東京市小石川區小日向水道町七十三番地

關成館

【振替貯金口座】東京第五零貳番

大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角

三木佐助

【振替貯金口座】大阪第七九番

新體日本文學史教科書  
定價金四拾五錢



